

退職記念特集

未来への躍進に向けて...

常盤台を去るにあたり一言



池田 攻

工学部 機能材料工学科 教授

想えば、山口大学工学部に助手として赴任し38年が過ぎ去り、この度定年を迎えました。東京駅から寝台特急の「富士号」に乗り、宇部駅に着いたのですが、西も東も分からず最終的に宇部市の中心部は宇部新川駅であることが分かり、どうにか山口大学工学部に着くことができました。この間、日本の経済的な躍進、裏を返せば飛躍的なエネルギー消費とともに定年を迎えたという言葉に尽きるような気がします。ブルートレインとして知られる「富士号」は当時SLが牽引しておりかなりの俊足でした。すなわち、まだ石炭の時代だったのです。そのうちに、所得倍増政策とともにインフレ時代

を迎え、石炭から石油の時代に突入しました。私の月給も3万円から倍以上の10万円まであっという間に上がりましたが、対米ドルレートは占領軍時代の360円のままで、専門書の洋書の購入には大分苦勞しました。今では約三分の一でよいのでその重圧は推して知るべしです。

私が赴任した当時は今の本館が建設中で、最初は旧校舎のいわゆるカマボコ長屋風の木造の校舎に研究室がありましたが、最初の夏休みが過ぎた辺りから新築の本館に移ったので、私は本館とともに常盤台で過ごしたといっても過言ではありません。新築の本館にはエレベーターが無く重量物の運搬



日西ジオポリマー共同研究のひとつ、DC生と共に

には不便でしたが、当時は頑丈屈強な学生が多く余り苦になりませんでした。最近では台車に頼る傾向が強く、車や宅配に頼る社会傾向が学生の精神力を弱くしているようで、かなり気になる部分です。

やがて、図書館の新築があり、学術雑誌の数もほぼ満足のいく水準に向上しました。その前は宇部興産の図書館に出向いていたので大いに助かりました。しかし、最近ではインターネットの世界になり、図書館に直接出向く機会もめっきり減っており、便利になった反面、情報洪水に悩まされる悪い面も出ております。これも情報社

会という一大エポックの到来のせいで、学生の就職もインターネットの世界になってしまいました。しかし今思うと、工学部に計算センター（当時はそう呼んでいた）が設立されたのは画期的なことでした。私は経験しておりませんが、隣の研究室の先生は宇部短大まで行ってコンピューターを使わせてもらっていたくらいですから、これはかなりセンセーショナルな出来事でした。私も物珍しいこともあり、特に夏はパンチカードを抱えて通ったものでした。何故かというと、エアコンが効いているのは計算センターだけだった

からです。そのうちに、工学部全館がエアコン解禁になり、PCのできる部分が多くなり行かなくなりました。

以上のように、現在の8階建ての工学部に象徴されるような今の工学部になるまでにはかなりの変遷があり、これからどうなるのか予想もできません。しかしエネルギー問題とその裏にある二酸化炭素問題は人類の将来を左右する切実な問題であることは周知のとおりです。これからの工学はこれらの問題を解決する方向でなければならないと思います。



工学部から常盤湖を望む

挑戦した業務を終えて



伊藤 敏穂

医学部 医事課主任専門職員

能力を生かした職場

私は昭和40年3月、山口大学医学部会計係へ事務職として採用されました。その後、事務局、学部で通算41年間（会計系35年、病院系6年）を山口大学でお世話になりました。

会計事務期間の前期18年は、法規集を片手に貪欲に仕事を吸収し、麻雀大会、ボウリング大会、スポーツ大会や夏のキャンプ等ではよく幹事をして「よく学び、よく遊び」を実践しました。後期（係長昇任後）は一貫して「独創性を生かせる」学部の会計事務に憧れ、学部長等の支えもあって、自分としては満足できる仕事ことができました。

退職6年前に、高齢者社会への貢献も考え、初挑戦の不安はありましたが医事課を希望（他が敬遠部署）して医事係へ決まりました。その後は、医療事務講座（資格取得用）等で知識を得たため、1年目から無難に仕事ができ自信になりました。

一方、医療従事者の努力を正当に診療収入に反映する難しさと、施設基準等の知識の差で収入が数千

万円増減する怖さも知りました。特に、複雑化する診療報酬内容に対応するためには、熟知した専門知識と数年先を見据えた見識が必須と思われました。

この度、定年により41年間の勤めを終えますが、決して短くない歳月を顧みますと、全ての部署での思い出はありますが、常に積極的、かつ質を考えた仕事の達成感に満足しています。ひとえに各部署の皆さんの理解と協力で支えられた結果と感謝しています。

仕事の姿勢と 費用対効果の先取り

○採用直後に、先輩から「自分で調べて確認し、先を見て実行する」と規則遵守のうえ効率を考えた仕事をするを教えられ、2年目の会計検査院検査で、農学部の会計係長が1日中責められ、一言も返答できない様子を見て、仕事に対する姿勢と厳しさを知らされました。この経験が、後の仕事に対する積極性、正確性を培いました。

○係長3年目に、文部省（当時）の研修仲間である予算班の主査から、概算要求等に関して、説明資料とは別に「要求事項を1～2枚程度でアピールすることが有効」などの見る人の立場で作成すること、生産性かつ費用対効果が重要である企業的手法を教わったことが、その後の業務（資料作成、患者対応、運用等）に役立ちました。

学部での思い出

○光附属学校では、附属教員は県との人事交流のため、県と国の違い（人事・給与等）の質問が多く、2年半は人事規則等を必死に覚えました。また、全窓枠改修時の安全管理や日常での児童、生徒を相手に戸惑いながらの業務は、単身赴任の新鮮さもあり楽しい思い出となっています。

○工学部における概算要求や予算配分等の業務は繁忙で苦勞もありましたが、達成した感激は忘れられない思い出です。ただ、経理係での業務量は半端ではなく、5名で予算、収入、旅費、謝金、前途資金等の支払いの外に、委任経理金と科研の100万円未満の契約・購入まで担当（上司決断）し、優秀なメンバーに支えられましたが、予算規模が大きい毎日深夜の帰宅でした。しかし充実した3年間でした。

○医事係長2年目の9月、事務部長から事務職員による経営改善WG（週1回（2時間）開催）を依頼され、6か月間で病院長・事務部長直属の「病院経営戦略室」が要望どおり設置され、半年と短い間でしたが国内研修（私立へ：医療従事者、事務）の企画や病院経営分析調査等の独立法人化に向けた体制へ一歩踏み出せた喜びは格別でした。

○その他の思い出として、平川移転の先発となった農学部農場では、仮住まいの白石荘（附属山口中

学校側)から朝田経由のバス通勤(1時間)の上、事務室まで湿地帯造成通路のため長靴通勤や蝮等で苦勞したこと。教養部では物品調査して物品管理簿を作新(1/4の記載漏れがあり)したこと。教育学部では少子化問題を抱えながら、改組や6附属を含めた大所帯の改革を中心とした概算要求等での資料作りで、学部長等と苦樂をともしにしたことが、懐かしく思い出されます。

悔しい思い出と 気になること

○医事課2年目の6月に実施された特定共同指導で、救急とICUの看護の混在看護を指摘され、高額を返還しましたことに関して、事前(8月)に問題点(日々の割り振りで病棟を区分することは、法的には可能だが現場では不自然のため維持できない)を知ったために見直しを求めましたが、なかなか理解が得られずやっと4月、新事務部長を迎えてから改善の検討に入ったものの、前年の定例報告(8月提出)が対象のため間に合わずに悔しい思いをしました。

○法人化後は、大学全体で生産性と費用対効果が問われていますが、病院収入は大きな財源であり、確保に注目されています。特に、収入の増減に影響する医療事務は、専門知識の裏付けと将来を見据えて担う義務があるものと思っています。病院は法を遵守した上で、より

費用対効果を上げることが重要ですが、最近は目先の解決を優先することで、法的及び費用対効果の見過ごしが感じられますが、杞憂であることを願っています。

DPCの行方と 病院収入確保に期待

現在のDPCは、平成14年度からの基本調査、特別調査、学会調査により総合的な観点から診断群分類毎に所定点数を決めています。今後も医療費抑制傾向は変わらず、医療機関関係係数(出来高との担保)も平成22年度に廃止され、所定点数もコストを参考とする方向に進んでいて、最終的に一日定額から一入院定額に移行すると聞いています。

本院は、これまで手術等で最大限の努力をされていますし、先進医療等の新技術や専門医療で特化を目指されています。一方、新患者の増

加が都会ほど見込めないため、取り漏れを防止する体制や診療録管理センターの生産性を重視した活用等が急務と思われます。

附属病院収入は山口大学の財源です。医薬品の消費購入等で支出を抑えながら費用対効果をあげ、疾患毎のコストの把握が急務ではないでしょうか。早め早めの対策を期待しています。

終わりに

最後になりますが、山口大学はこれまで「知恵を出し」「行動する」それも「いち早く」で発展し、高く評価されてきました。これからは、大学間格差が顕著になり、競争も厳しい環境ではありますが、教職員が同じ理念で切磋琢磨して、さらなる発展をとげられるよう祈念しております。本当に長い間お世話になり、有り難うございました。



教育学部附属光小学校のゴルフコンペに参加して
(筆者:後列右から5番目)

山口大学での41年間を終えて



岩本 美江子
医学部 保健学科 教授

はじめに

昭和40年5月山口大学医学部（故有菌初夫教授）に助手として採用され、保健学科を定年退職する今日までよく勤められたと我ながら感心し、お世話になった多くの皆様にお礼申し上げます。

昭和41年4月に公衆衛生学講座野瀬義勝教授が学会長として日本産業衛生学会を宇部市渡辺翁記念会館で開催されたときは、何も分からないまま隣の教室員としてお手伝いしたこと、そしてその40年後の今年3月に衛生学講座原田規章教授が学会長として同じ場所で日本衛生学会を開催され、その組織委員のひとりとしての仕事を最後に退職していくことに何らかの因縁を感じながら、私の退職は二の次で、3月の学会の無事終了を願っているところです。衛生学・公衆衛生学を専門としてきた自分にとって、このお世話になった二つの全国学会が宇部市で開催されることに巡りあえたことに感謝しています。

医学部（現 医学科）での36年間

まさに講座制である医学部に36年間お世話になりました。医学部といえども基礎（社会医学）講座であったため、潤沢な研究費等にはあまり縁はないものの、実験動物、薬品、機器費用には何不足なく教育研究をさせて頂きました。いろんな課題が研究テーマになる衛生・公衆衛生学において、共通して唯一の研究手段が「統計学」であると常に強調されていた故大崎純助教授に鍛えられたことが、間違いなくその後の私の研究武器の一つになりました。何かと大学での講座制云々と議論されることもあります。この講座制の助手、講師時代にいろんな面でしっかり鍛えて頂いたことが今になって役にたっていることを痛感しています。互いの**人格尊重**の上での、縦社会の大学の講座制は私にとって大変有益なものでした。

保健学科での5年間

医療短大時代に非常勤講師として長年講義実習を担当していましたが、保健学科開設と同時に検査技術科学専攻専任教員として勤めました。保健学科は医学科と異なり大講座制で、教員それぞれの責任で教育研究が熱心に行われています。これまで培ってきた専門の科目を1人で責任を持って両専攻の学生教育に携わったことが妙にうれしく新鮮で、大学勤務の最後の5年間を力一杯発揮できたことに大変喜び

を感じています。

山口大学 イコールパートナーシップ(E P)委員会

昨年、2年目の山口大学EP委員会委員の就任に当たり、委員長の脇條先生からハラスメント防止対策WG長の指名を受けました。私は1年後には退職する、医学部は宇部にあり、さらに、今年はハラスメントガイドライン（アカハラを含む）制定の大変な年になることが予想される、というようなことで少し躊躇しましたが、今回は委員の意見をまとめるのに徹底しようと思い引き受けました。度重なるEP委員会委員の活発な討議、それに対するパブリックコメントの意見募集、さらには教育研究評議会によるコメントなどを受けての繰り返しされる討議の結果、ガイドライン制定は目前になっています。

国立大学が法人化となり、科学研究費獲得も厳しく、教育研究現場にも競争原理が導入されてきた今日、この度の経験により、松蔭の地である山口大学が民主的な組織の基にますます発展することと確信しています。



最終講義の後で（筆者：中央）

私のチョウの研究と山口大学



遠藤 克彦

理学部 自然情報科学科 教授

27年前に山口大学理学部への転勤が決まったのは、私がケニアのナイロビに滞在しているときでした。20ヶ月余りのナイロビ滞在を終えて2月上旬に帰国し、中旬に初めて山口を訪れたときは、“みぞれ”が降る寒い日で、熱帯から帰った直後の私にとって、思い出に残る一日でした。列車から降り、小さな湯田温泉駅の前で、“ああ！ここに赴任するんだ。”と周囲を見回した時のことを、今でもはっきりと覚えています。

その後、山口大学理学部の講義室で、千葉教授の研究室の卒論発表の予行演習を聞き、研究室を見学させてもらった後に、“研究設備が殆どない状態で赴任して、配属される学生さん達に、どのような卒業研究をしてもらったらいいのかなあ？”と考えたことを、今

でも覚えています。

赴任してから1年間は、理学部の増築部分が未完成で、私と藤島政博助手（当時：同じ時期に赴任）には、隣どうしの仮の研究室しかありませんでした。幸い卒論学生の配属がなく、車で山口県内を走り回り、その植物相や昆虫相を観察する十分な時間がありました。その結果、研究材料とするチョウの捕獲・補充が容易で、近くの山からチョウの食草を大量に採集できる山口大学は、私が行ってきたチョウの研究を継続するために非常に適した場所であることがわかりました。

山口大学に赴任する以前は、“他の研究者が容易には真似できないように”と、微細手術の技法を磨き、その技術を基礎に、“特色ある研究”を目指してきました。しかし、この研究手法では、手術の技法を練習・習熟するために多くの時間が必要であり、限られた期間内に卒論の学生さん達と、共同研究を行うことは非常に困難です。そこで、実験材料とするチョウの補充が容易で、餌とする植物が容易に手に入る山口大学の“地の利”を生かして、チョウの大量飼育

と大量供給を基礎とした研究に切り替えました。研究の方向を切り替えることによって、卒論の学生さん達と一緒に研究ができるようにはなりましたが、逆に、学生さん達の協力なしには、研究室の研究が殆ど進展しなくなってしまいました。

幸い、教養部におられた故岡嶋昭教授は、私が山口大学に赴任する以前（横浜市立大学の教授であった頃）からの知り合いでした。その関係で、私が専門（内分泌学）としていない分野を専門（生化学のエキスパート）とする熊谷寛次教授（当時）と知り合いました。熊谷教授の協力が得られたこと、更にはチョウの大量飼育・供給が可能になったことによって、研究可能な分野が大きく広がりました。

私が山口大学理学部に在任中に、研究室に配属された多くの学部や大学院の学生さん達の協力によって、私一人では手に負えないほどの多くの研究成果を世に送り出すことができました。もし、研究室に配属された学生さん達の協力がなければ、恐らくこのチョウの研究を継続することさえ不可能であったと思います。定年で山口大学を退職するに当たって心からお礼を申し上げたいと思います。

環境強度研究



大崎 修平

工学部 機械工学科 教授

皆様に感謝

工学部常盤台で過ごした年月は学生時代を含めると実に43年となり、その物理的な時間の長さに唖然とする反面、わが身を通して振り返れば束の間のことであったようにも思えます。定年退職にあたり、このような感慨を抱くことができますのは、幸いにも身を置く川の流れが比較的穏やかであったお陰であり、それもひとえに、機械工学科をはじめ工学部教職員の方々のご支援および多くの学生諸君の切磋とご協力のお陰に他なりません。心より感謝申し上げます。

愚直一徹

昭和43年3月、工学部として第一回目の大学院修士課程修了生の一人でもありましたが、修了と同時に機械工学科金属材料講座の助手に採用していただきました。金属材料を相手に今日まで続けてきた環境強度研究は、このとき清水達次先生の下で行ったステンレス鋼の応力腐食割れ

(SCC)の実験が始まりです。美しく輝くステンレス鋼が高温塩化物溶液中で引張応力を受けると無残にも短時間で破壊する様は驚きとともに、許しがたいことに思えました。昭和46年には工学部併設の工業短期大学部機械工学科に移り、材料力学の講義を担当することになりましたが、ステンレス鋼のショックをなお引きずっており、そもそも材料力学は「ものに形を与える」デザインの基礎工学でありますので、応力と環境が共同して「ものを崩す」SCCは材料力学の重要な課題に違いないと思い定め、研究を続けて参りました。

昭和48年、1年間の東工大での内地研究を契機に対象はアルミニウム合金に移りましたが、これまた、軽銀として通常は高貴な輝きをもつ材料がSCCにより朽ち果てる様は、ただ「もののあわれ」と見過ごすことのできない、どうみても人の夭折に重なる悔しい事に見えました。しかし、この分野の研究は材料の普遍的な課題とはいえ一世紀も前から報告がある古典的な問題で、また学際分野でもあり、その解明は非力・浅学の者にはあまりに無謀な挑戦、まさに「螳螂の斧」であることを常に感じていました。だが、生来の不器用者である上に、短期大学部にあって気長な実験をマイペースで進めることが許されたおかげで、幸か不幸か方向転換には至らなかったわけです。当時、夜間の短期大学部に学ぶ学生諸君の大半は有職者であり、現場の技術経験に豊かな年齢も私より上の方も多く、「教えるとは学ぶことです」を文字どおり実感する日々

を過ごしました。学生側も教わる謙虚さと学ぶ厳粛さを体現してくれていたように思います。

ところで、その頃の古い試験問題ファイルを省みると授業の深度が昨今の学部授業を上回っていたことに戸惑いを覚えます。平成元年、工学部創立50周年の記念講演に来学された文化勲章受章者西沢潤一東北大学教授の揮毫による「愚直一徹 大道無門」の額が附属図書館工学部分館(当時)に掲げられました。以来、これを目にするたびに、自分も愚直に環境強度研究をやるしかないかと、勇気を頂戴致しました。

卑にあらず

平成2年10月、工業短期大学部を含めた工学部学科改組により、工学部に戻るようになった。再び卒論や大学院の学生諸君と一緒に研究する悦びを感じながら、近年は、水素社会構築に向けた産官共同のプロジェクト研究に取り組んできました。研究室の学生諸君にはこれまでも、「山大生、粗にして野だが卑にあらず」と声をかけてきましたが、今は粗野が「オシャレで優しく」になり、それはそれで結構なことです。ただ後半の「卑にあらず」、この心の座標原点だけは伝統としてつないで頂きたいと願っております。

流れない「時」もある



岡光 一浩

人文学部 言語文化学科 教授

山大を去る日の来ることは、しばらく前から頭では分かっていた。しかし、現実にはその日が近づいてくると、胸のうちは、なにがしかの感懐に包まれずにはいない。もう40年も前、教師になりたての頃には、想像もつかない、ほとんどありようもない思いだ。まだ、身辺整理のために、ゆっくりと感慨にふける暇はないが、今、ここにちょっと筆を進めるだけでも、歳月が、ほんのつかの間のようでもありながら、なにか数限りない思い出に満たされた長い流れとなって姿を見せる。——1976年春、卒業後10年ぶりに教師として帰らせていただいて、早や、30年、私は山大によって育てられ、私の研究や教育は、良きにつけ悪しきにつけ、人文学部と独文のその一端を担ってきたと言えるが、それらに思いを致すとき、自分の非力を顧みて、忸怩たる思いに包まれ赤面する。——そんなこともあって、退職に当たってのこの原稿もお断りしていたが、責任を果たす意味で、遅ればせながら駄文を綴ることとなった。

先日、私は、同僚の先生方や学生諸君の助力によって、最終講義なるものを行ったが、時間の都合でその場

で話せなかったこと——講義で、近い将来、社会をリードしていく学生たちに、いま「文学する」ことの意義を、どのように伝えるべきか、について少し述べておきたい。——残念ながら、いまは、文学の時代ではない。だらだら書いてある文学なんて読んでいる暇はないと、誰もが考えているかのような時代である。高校生にも学部生にも、文学を勉強して得なことがありますか、と聞かれる。そんななかで、文学の講義をどのようにするか、随分と苦勞する。私は、講義の最後にはいつも感想や意見を学生に求めるが、その評価の中で一番嬉しいのはなんとと言っても「退屈しないで、面白く話が聞けた」という点だ。授業ハンドブックには、授業についての様々な工夫マニュアルが載っているが、文学の講義で学生を退屈させないために、私は、なによりも、「文学する」ということが人生の意味を希求するところにあり、一人ひとりが自分の問題として心に問い掛けてみることにあとと強調する。敢えて言えば、研究者の目から見た文学ではなく、文学青年のもつ人間の心でもって文学を読むよう求める。そうすることによって、文学が原点とする「心の浄化と救済」も、現実や時代に対する批判や弾劾の視点も生まれてくる。——いま、私たちは人類の、或いは社会の進歩の中にあるのだろうか。進歩は必要だが、もっと違った人間性に基づいた進歩もあるのではないかと。とりわけ日本は、効率主義や物欲・金欲にまつわる犯罪、テロや戦争の脅威の中にある。これらはみな、人間の心がなす仕業だ。科学が進歩しても人間の心の働きは分

からないことばかりである。もはや、「人間らしい心」という言葉など、空疎にしか響かない時代なのかもしれない。いわば、いま、私たちは行き先の分からないガレー船に寄せられたような、なんとも息苦しい日常を生きている。そういう先行きの分からない時にこそ、「文学を読む」ということが、単なる愉しむためだけでなく、自分を知り、厳しさが予想される未来に対処できる多くのことをもたらすのだ。——私は文学の講義をいつもそのような視点からしてきた。勿論、そんな「心」に立ち返ろうとするような論文など、あまり評価されない。しかし、学生に対する文学の講義が、字句や語句の厳密な解釈ばかりに終止したのでは、学生の文学への興味は消え失せるばかりで、文学希望離れを食い止めることはできないだろう。「心」という文学の原点に立ち返って講義してこそが、将来を担う学生たちに、社会の失われた心を取り戻すよう託すことができると信じる。

最後になりましたが、定年まで、私自身、健康で、かつ平穩に過ごさせていただいたことを皆様に感謝申し上げます。有難うございました。山大を愛する私の心は移ろう時の流れの中ではなく、永遠です。山大よ、永遠なれ。



研究室卒論中間発表会
(筆者:中央 2005年12月)

教育研究に適した山口での36年間は最高でした



加藤 昭夫
農学部 生物機能科学科 教授

山口大学に全国で最後に農芸化学科が創設されることになり、1970年4月に山口大学に助手として赴任しました。当時は大阪までしか新幹線が走っておらず、山陽線の特急で山口（小郡）に到着したのが今でも懐かしく思い出されます。私は博士課程1年の時に結婚しており、妻は院生でしたので、1人で小郡駅に着いたときには何とも寂しくもありましたが、希望に燃えて山口大学にやってきました。

新学科では

山口大学には農学科と獣医学科しかなく、新たに農芸化学科が5講座で教授5、助教授5、助手5、教務員1、事務系職員2名の体制でスタートしており、私が最後の講座の助手として、公募で採用されました。当時は新学科らしく先生方、特に助教授以下の方は熱意をたぎらせて教育研究に励んでおられました。私は博士課程を終えたばかりで学生気分も抜けきれず、深夜遅くまで研究室で実験した後で、年齢のあまり変わらない学生と湯田の町に食事に行くのが日課になっていました。現在では当たり前ですが、講座制にもかかわらず、助教授以下の若手教官の研究テーマは教授からは強制されず、自分のやりたい研究テーマをやってよいという風潮が確立しており、自立した研究者としての一歩を歩むことができました。5年後

には生物化学講座から食品化学講座の助教授になり、2分野の教育研究に携わることができたことは幸いでした。

カナダに留学

新講座で3年間教育研究に携わった後に、当時の小林邦彦教授のご配慮の下にカナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）に2年間客員助教授として、Dr. Nakaiのもとで、蛋白質の研究を行う機会に恵まれました。家族（妻、子供3人）とともにバンクーバーで研究生活を過ごすことができ、子供たちの英語がネイティブカナディアンと遜色のない発音をするのに時間がかからないことに驚いたものです。私はジャパニーズイングリッシュで、カナディアンと積極的に話をし、多くの友人を得ることができました。大学では研究に専念できる環境に恵まれ、蛋白質の表面疎水性の概念を提唱し、その測定法を確立することができました。カナダでの経験は以後の研究生活に大きな影響を与えました。この貴重な経験をすることができたのは、日本で学科の先生方（小林教授等）が2年間も私の講義を担当して頂いたおかげであると感謝しています。

バイオ研究に新しい息吹

カナダから山口に戻った時のフーリングは今でも覚えていま

す。帰国直後に東京の親戚で数日過ごした時には、カナダでの自然の中で生活できたことがとても懐かしく感じられました。ところが、山口に戻ってみると、山口とカナダに違和感を余り感じず、山口の自然、風情がカナダのものと共通したものがあることを感じました。1980年代には遺伝子工学が身近な技術として利用できるようになり、蛋白質研究やバイオ研究に飛躍的な発展をもたらしました。山口大学農学部でも遺伝子工学に精通した教員を採用し、また、その実験施設をいち早く立ち上げました。当時は20-merのDNAをオーダーすると数万円かかるため、DNA合成機も購入し、自分で多くのDNAプライマーを作成していましたが、数年後には合成DNAの

価格が10分の1ぐらいに低下し、合成機はお蔵入りとなりました。遺伝子工学の登場により、蛋白質、バイオ研究は飛躍的に発展し、私の研究も大きく前進させることができました。1989-90年に大阪大学蛋白質研究所機能評価部門客員助教授に招聘され、一年間2名の院生とともに大阪での研究生活を送ることができ、貴重な体験をしました。

山大生の資質は 優れている

私は長い間、山大で教育研究に携わり、いくつかの研究成果を得ることができましたが、これらの成果は学生・院生諸君によるところが大きいです。山大生は洞察

力、粘り強さ、努力という点では東大、京大など大規模大学の学生と比べ遜色はなく、研究を行う上でのハンディは全くありません。実際に、私の研究指導で1993-2005年の間に16名の博士が誕生し、国内外の大学教員として、また研究機関や企業での研究者として活躍しています。勿論、修士修了者、学卒の学生も食品、バイオ産業界で活躍しています。こうした学生を送り出したことに誇りを持つと同時に、多くの先生方のご協力に感謝しています。

退職後も科研費やJSTのプロジェクトの遂行のために、山口大学にお世話になりますが、本学が一層の発展と優れた学生を育てられるよう心から願っています。



本研究室に1999年に海外研究者として滞在した
ベルリン工科大のDr.Einhorn-Stoll 夫妻が再来訪(2005年4月)
(筆者:右から2番目)

42年間の思い出



上谷 克弘

人文学部・理学部 事務長

就職と通勤

私は、昭和39年（1964年）3月5日付けで、山口大学に採用され、農学部会計係に配属となりました。当時農学部は下関市長府にありましたので、実家から通勤出来る、ということが就職の決め手でした。高校の卒業式が3月1日でしたので、何も準備出来ず、初出勤は学生服姿であったことを記憶しています。（ちなみに初任給は、12,400円）通勤は、バイク、バス、国鉄電車、路面電車を乗り継ぎ、距離にして約25km、所要時間は約1時間30分くらいでした。

ところが、昭和41年（1966年）10月に、統合移転ということで現在地の山口市吉田に移転することとなりました。家からの通勤は、わずか2年半で終わってしまったのです。以来、山口市の住人となり、60歳となった今では、人生の3分の2を山口市、山口大学で過ごしてきました。言い換えると、私の人生は山口大学が全てと言えます。

宇部地区勤務と通勤

昭和55年（1980年）4月、当時の工業短期大学部（1年）へ転任となり、宇部地区での勤務が始まりました。その後医学部（2年）、医学部事務部（5年）と連続8年間、その後、医療技術短期大学部（3年）と勤務し、宇部地区での勤務

は合計で11年間となりました。

宇部地区への通勤は、自家用車を利用しました。通勤距離約40km、所要時間約1時間でした。連続8年の間、スピード違反3回、一旦停止違反1回、期間通算規定により免許停止30日1回。（ごめんなさい。）長距離通勤にはリスクが付き物ということを感じました。

広島大学勤務と通勤

大学勤務42年間の内、2年間（平成8～9年度）だけ広島大学に勤務しました。平成8年度から始まった補佐級の交流人事により、広島大学医学部学務課課長補佐として着任しました。この経験は私にとって、多くの人たちと人脈が出来たこと、学務系を経験したことなど、大変大きな財産となりました。当時広大医学部には、すでに保健学科が設置されており、入試や学科運営などを体験しておりましたので、後に山口大学でも医療技術短期大学部を改組して医学部保健学科が設置されましたが、くしくも保健学科設置に携わることとなり、縁の深さを感じました。

広大勤務の2年間は、山口から新幹線通勤をしました。毎朝5時半に起床、6時半頃「湯田温泉駅」から乗車、小郡駅7時5分頃の新幹線こだま号で広島駅8時頃着、広電バスで「広大病院」まで乗車、職場には8時15分頃着。通勤距離約150km、所要時間約2時間という

遠距離通勤を2年間体験しました。

（新幹線定期代1ヶ月113,880円、後に116,090円に値上げ、ちなみに通勤手当は、当時の最高上限額の7万円でしたから、毎月4万3～6千円の赤字。）

冬季には、真っ暗いうちに家を出て、小郡駅のホームでやっと東の空が明るくなる、という毎日はとても寒くて侘びしい思いをしました。遠距離通勤にありがちな乗り越し（帰路）も何回となく経験、しかも新幹線ひかり号ですと、小郡の次は小倉若しくは博多ですか

ら、気が付けば、博多～、博多～、ということもありました。終便ですから帰る電車もなく、博多泊まりでした。（今となっては、懐かしい。）これも多大なリスクでした。

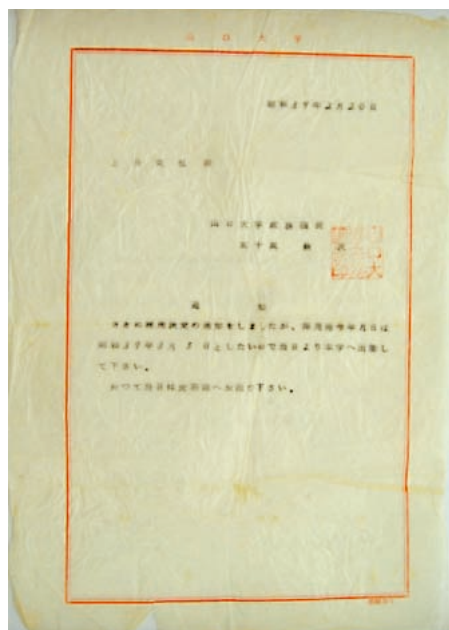
おわりに

42年を振り返ってみますと、いろいろなことが思い起こされます。楽しかったこと、辛かったこと、まさに人生そのもので、思い出は尽きませんが、今回は誌面の

関係もあって、通勤の思い出を述べてみました。

幸い健康にも恵まれ、また、何よりも先輩、同僚、後輩諸氏に恵まれ、今日を迎えられたことに深く感謝申し上げるとともに、私を育ててもらった山口大学に、心から「ありがとう」とお礼申し上げる次第です。

最後になりましたが、山口大学のますますの発展と皆様方のご健勝を祈念いたします。



山口大学採用通知書



広島大学勤務当時の定期券

退職雑感



河野 俊一

工学部 機械工学科 教授

山口大学工学部へ助手として赴任したのは昭和46年8月で、うら寂しい廃坑跡を通る小野田線経由で宇部に着いたことから、最初は島流しにあった気分でした。研究室は現在の工学部本館事務室があるところで、夏の日差しの中で1台のスカイラインが停車していたのが印象的で、非常に静かな環境のように感じました。過去は美化してみえるのか、おおらかで良き時代でした。それから30数年、大学および工学部は改組、教養課程の廃止、工業短期大学部の廃止、工学部夜間主コースの設立、博士後期課程の設立という時代の要請という名目での変遷を経て独立法人の道を歩んでいます。私も時代の流れに対応したつもりでしたが、その大波に翻弄されていたように思えます。その私が、何とか退職を迎えたのは、職場の環境や周囲の方々のおかげと感謝しています。

では、おまえは大学で何をしたのか、何が誇れるのか、と問われると答えに窮してしまいます。過去の研究を振り返ってもいずれも未完成といった感がし、未だ研究への未練は残しながらも時間のなさを痛感しています。また、最近

の学生への講義を考えると、^{のれん}暖簾に腕押しで、教育しているという実感が少なくなりました。退職前になっても、教育・研究の道を模索しており、悟りの境地からほど遠いというのが現状です。

未だ迷っておりながら学生教育といった話をするのも面はゆいなのですが、今の私の考えを述べてみたいと思います。学生へのつきあいに対する個人的な感想では、自分と同僚あるいはわずかに先輩の第1期、歳とった先輩の第2期、それから自分では先輩のつもりでも教師と教え子の関係の第3期がありました。第1期、第2期の学生とは、勉強以外でも共に遊び、格好をつければ良い意味で密にコミュニケーションをとっていました。例え成績が悪くても、単に勉強していないだけで、基礎学力は十分備わっており、当時の教育が良かったと思えないのですが、その殆どの方が社会で活躍されています。このような過去の実績から、第3期である最近の学生も社会にできればそれなりに活躍すると楽観しています。

しかし、それでも心配なのは基礎学力の低下です。それも、単なる知識では無く、体験又は疑似体験の結果に得られる、知識を通して身につく概念・感覚が欠けているように思えます。機械工学科の学生で物理を少しでも囁った者は、ニュートンの第二法則は知っています。しかし、それは知っているだけで、力の概念や感覚がピンとこない学生が多くなりました。これはニュートンの第二法則が身に付いていない、ということではないでしょうか。例えば悪いかもしれませんが、還暦を迎えてから自動車の運転免許をとった私が、信号の

ない道路を左折する場合の感覚がこれに似ています。左折ですから、まずは右からくる自動車に注意を払うべきですが、60年間横断歩道を漫然と渡ってきた私は、左右共にみて、まず右に注意という感覚がありません。この感覚を養うにはある期間の体験が必要であると思います。共通一次試験およびそれに対応する教育は、単なる断片的な知識の詰め込みやパズル感覚の知識の教え込みに終始し、先に述べた体験する時間を必要とする感覚・概念の習得を阻害したと考えています。では、大学ではどのような教育をすれば良いか問われても、結論らしい解答を用意することはできませんが、疑似体験を繰り返し、知識を概念的に自分のものになったような気にさせる、具体的には幾何の証明問題のような一つの命題から論理的に結論を導いていく訓練を繰り返すことが必要であると思います。この教育は、結論に到達する道筋は色々あり、それを論理的に思考する能力を養うのが目的です。最近のすぐに効率が要求される教育とは異なり、このような出題の採点には多大な時間がかかると思いますが、学生自身が失敗したゆとり教育等の犠牲者だと思うと、山口大学で少しでもその救済に努力すべきではないでしょうか。このためには、月並みになりますが少人数教育、教育内容・方法の見直しおよび教育への情熱が必要であると思います。

最後に、これからも良い意味で社会に貢献する人材を育成されるよう祈っております。長い間お世話になり、ありがとうございました。

退職します



北野 寛治
農学部 事務長補佐

上司の方がよく「あと何年しかない、もうすぐ退職だ」等、言っていましたが、私にも順番が回って来ました。

マニュアル

私は終始、学務関係の業務を担当してきました。中でも学生による事務局封鎖、学部封鎖は、今では考えられないような事件です。また、入試の後は1週間も掛けて、なれない算盤で得点を集計していたこと。日中国交回復後、中国山東大学との交流による留学生の受入をしたこと。課外活動における海難事故で1日中、海上保安部による聴取を受けたこと。既に思い出です。

医学部では病院当直があり畑違いの者には言葉すら解らず、看護

師さんと意味不明な会話をしていたこと。でも、一生懸命でした。

今年は各係でマニュアルを作成しましたが、最低限の業務を無難に行うにはマニュアルは有効です。私も最近、前例と経験とで、何となく無難に過ごすようになっていました。

本来学生相手の業務には、状況がそれぞれ異なるためマニュアルや前例は参考にしかありません。けれど学部では最後には教員が対応を決めるので、前例があると、それを示したことも多く、今反省しています。

学生事故と大学職員

平成16年2月に本学理工学研究科に在学中の二男が、道路横断中に本学学生の運転する車にはねられ死亡しました。

当初、当事者の学生は、「レポートの提出が気になり、急いでいたため前をよく見ていなかった。」と言っていましたが、後日、検察庁における検察官の聴取では「先頭で信号待ちとなり前方に車両がないので、速度を出すチャンスと思いアクセルを踏み込み、100km/hを相当超えたところで気がついたら事故を起こしてい

た。」と供述していました。

このような状況であっても、これまで学生対応を業務としてきた大学職員としては、加害者である学生に対しても、穏やかに接するしかなく、自分の立場が憎い、本当に辛い事件でした。

これからは大学職員ではなく被害者の親として、いろいろな方法で故人を弔っていくことにします。

お世話になりました

40余年の大学生活の半分以上は、教育改革の言葉とともにあったような気がします。私が初めて勤務した「文理学部」、同じ係を2回も担当した「教養部」、初めて学部地区へ通った「医療短大」そして、主任で、係長で、専門職員で、専門員でと4回も勤務した「学生部」、思い出の深い部局は、すでに改組改革のため存在していません。

最後の職場となった「農学部」はどのように改革していくのでしょうか。発展を願っています。

上司及び多くの同僚の方々、長い間、ありがとうございました。

42年間の思い出



末永 勝己
教育学部 事務長補佐

山口大学に就職して42年、このたび無事に定年退職することになりました。

山大での長い生活では、いろいろなことがありますが、過ぎてしまえば良い思い出ばかりが残ります。

これも皆様方のおかげです、本当にお世話になりました、ありがとうございました。

業務での思い出

現在は山口市市民会館となった建物の側を自転車で高校に通っていた頃、白壁の古い木造の2階建て…庭には大型の三輪自動車…門柱には山口大学…でも学生は居ない…何をする所だろうと思っていました。

昭和39年3月5日、その建物の学生部厚生課保健係に採用されました。仕事は体育会系の課外活動の援助が主で、ギンギンと床が軋む事務室で、学生達と夏は扇風機、冬は石炭ストーブを囲みながらの楽しい日々でした。

その後は、庶務系・会計系・学務系も経験でき、施設部では数億円規模の建物の現場説明と入札、医学部で

は献体のためのご遺体の受取からお骨の返還、連合大学院では4大学間の教職員・学生との交流など、いろいろな体験もでき勉強にもなり思い出も多いのですが、今でも懐かしいのは、暑さ寒さを一番感じた附属農場での仕事です。スイカ、果物、花卉等の学内販売、米の出荷、そして牛・ブタのセリ市場、その上、今は採れない松茸狩や学内初のゲートボール場を作ったことなど本当に楽しい思い出です。そして、そんないろんな経験がその後の仕事にも大いに役立っていました。

スポーツでの思い出

最初に体育会系の仕事をしたこと、前年に山口国体が開催され、補助員として参加したこともあり、それから定年を間近に控えた今でもずっとスポーツをしています。ちょうど就職した時にソフトボール同好会が出来ました、それから20数年間メインとして携わって来て、大学のいろんな職場・職種の皆さん、それと地域の皆さんとも交流が増え、これらも仕事に大いに役立ちました。しかし、歳と共にピッチャーとしての威力が落ち、試合に出るのがおっくうとなり悩んでいました。そうした時、スキーで膝の筋を切り潮時と思い引退しました。でも、主治医に運動を進められ、そこで出会ったのがソフトバレーボールでした。このスポーツは、老若男女を問わず室内で少人数でそして初めて

の人でもコミカルに楽しめます。その後すぐに山大には強力な女性リーダーの出現により地域の大会に参加し始め、チーム名「コミカルズ〇〇〇」として他チームにも名が売れ、成績も新聞の地方版に載るようになりました。

私にとって大学での一番の思い出は、いろんなスポーツが毎日出来ることでした。今から本当に寂しいのは、そんな楽しめるスポーツがみんなとできなくなることです。

最後にお願ひ

山口大学も法人化後は業務が省力化・迅速化が求められ、今までとは複雑に煩雑に変わって来ています。そのため毎日追われるように働いていかなければなりません。

しかし、そのためには、明るく楽しい職場で日々を送ることも大切だと思います。

ぜひ、パソコンの画面から視点をはずし、周りの皆さんと会話をしてください。

そして、これからも皆様方のますますのご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げます。



「コミカルズ〇〇〇」で優勝の賞状を持って
記念写真(筆者:前列中央)

若者と共に過ごした15年間



竹中 俊介

工学部 機能材料工学科 教授

私が山口大学に招聘されたのは平成2年、はや15年を経過し、この春大学を去ることになりました。この間を顧みると様々な面で感慨深いものがあります。私が大阪大学から工学部に赴任した際、一番印象深かったことは、本学の学生諸君が非常に若く見えた事です。その当時、工学部では大学院学生数が少なく大部分が学部生だったせいだろうと思います。現在、工学部では大学院生が増え、それなりに工学部全体の年齢が高くなっています。それでも大学と言うところは年を取らないところで、私も現在63才という実感は全くありません。ここを離れると今まで取り忘れていた年を急に取り返すのではないかと心配です。世間では様々の老化防止の方法が言われておりますが、何といっても若者に取り囲まれての生活が一番。その意味で、私を取り巻き支えてくれた学生諸君に感謝の気持ちでいっぱいです。

ところで、昨今の新聞、テレビ報道を見ると、若年層人口が急激に減少し、私のような高年齢層が急激に増えつつあるとの事、他人事とは思えません。私たちの現在の生活水準を維持する為には人口の減少をくい止め、若年層の人口増加をはかることが急務であると言われております。確かに人口を維持することは日本の将来にとって大切な事でしょう。しかし、思い起こせば、私の小学生、中学生の頃、日本は貧しく、学校では一

学級50～60人が普通で、その教育水準たるや現在とは比べるべくもなかったと思います。その時代に比べると現在の学生さん、更に低年齢層の人口ははるかに少なく、人口減少の恩恵を受け、実に恵まれた生活、教育環境のもとで成長してきたはずです。にもかかわらず、若者の教育環境、社会に対する順応性など多くの面で矛盾をかかえ、将来への社会不安が増加しつつあるように見えます。私たちの時代の貧しさ故の“実”人生観と現代人の物質的な豊かさ故の“虚”人生観の違いが原因のひとつであろうと思います。

人口減少問題は特に山口県のような過疎の県ではより深刻で、人口が半減する日も遠くないかもしれません。逆説的発想かもしれませんが、人口の減少は山口大学の学生諸君にとって、勉学環境の改善をもたらしてくれる絶好の機会かもしれません。例えば、欧米の大学のように広いキャンパスと行き届いた教育環境が整えられる時代が訪れるかも。大学のみならず、社会でも人口減少による諸問題が起こることでしょう。私たちが経験したことのない新しい社会秩序が生まれることでしょう。そこで私の提案です。人口の減少を機に今一度“ゆたかさ”、“ゆとり”とは何かを考え直してみても如何でしょうか。世間では少子化に対応すべく、スポーツ、芸術等のスペシャリストの養成、若年齢化が急激に進行しています。それ

はそれで結構なことです。悪く言えば、コンピューターで計算しつくされた無機的人間を養成しているに過ぎません。競争社会を支える少数の英才を養成しているに過ぎません。私は深い専門知識と幅広い雑学知識を持ち何ごとにも積極性と探究心を持って立ち向かう人間性豊かな若者に魅力を感じます。山口大学を何ごとにも順応できる幅広い人格形成の場にしていただくことを願っています。

大学では法人化に伴い、経済的

自立が要求されているようですが、大学の使命は何時の時代にも教育と研究です。前述のように戦後の混乱期においても一クラス50～60人程度でしたが、私が当大学で担当した必修科目の講義は平均で一クラス80人、専門基礎実験でも80人、半期で費やした経費は数万円程度、学生一人に換算すると実に1,000円にしか相当しませんでした。このような貧弱な教育環境の下で国を担う若者の養成など程遠い目標としか思えません。少

子化に向かって、学生定員の削減は大いに結構なことです。それに伴う教員、予算の削減には慎重であってほしいと思います。むしろ、少子化を機に教育環境の整備、充実を図っては如何でしょうか。若者の才能を十分引き出す中身の濃い教育を期待します。若者の才能を伸ばすことこそ大学の発展につながると信じております。

末筆ながら山口大学の発展をお祈り申し上げます。



63歳誕生日に

山口大学と私 -28年間を振り返って-



谷口 仁
農学部 獣医学科 教授

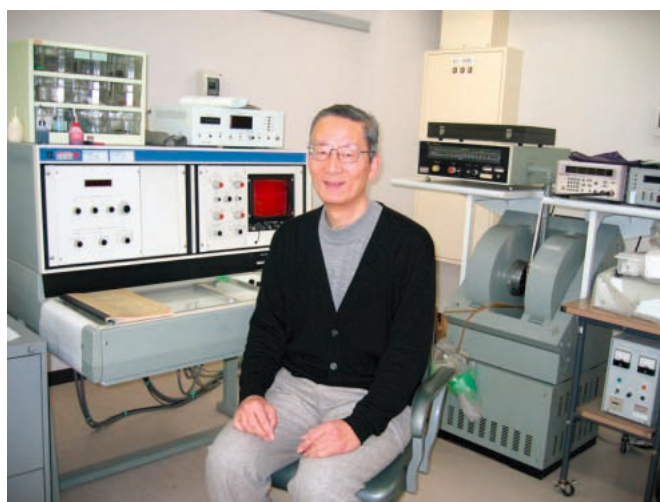
私は1977年（昭和52年）10月1日付けで教養部化学教室の助教授に採用され、博士研究員として勤務していたノートルダム大学放射線研究所（米国インディアナ州サウスベンド）から着任しましたが、私にとりましては国内で初の常勤職でした。以来28年余、1996年（平成8年）4月には教養部改組に伴い新設の農学部獣医学科獣医放射線学講座へ配置換えとなりましたが、ここに無事定年を迎えることになりました。振り返ってみますと、山口大学に対して私が目に見える形でいかに貢献できたかは心もとない次第ですが、教育・研究・その他においても自分なりに地道に務めてきたと思います。

教育・研究などについて

教育面では、主に理系学部1年生の化学と化学実験を担当し、専

門教育では放射線化学の基礎にあたる部分を講義してきました。化学の授業の受講生にはすべて自分の学生のような感覚で接してきました。受講生の理解を深めるための個人的取り組みとして、早くから毎回の授業で演習問題を課し提出された解答を添削返却することや授業に対するアンケートなどを行ってきましたが、今では全学的に教育評価との関連でより進んだ取り組みが求められており、教育重視の方向性は結構なことだと思います。

研究面では、山口大学就職後も前記のノートルダム大学放射線研究所における共同研究を続け、生体関連化合物の水溶液に電子線を連続的、あるいはパルス状に照射しながら、電子スピン共鳴分光法により、生成する短寿命ラジカルの構造決定や生成反応機構等についてのデータを集積してきまし



1979年に設置の電子スピン共鳴分光計と

た。スピントラッピング反応の速さについても、電子線照射系とガンマ線照射系を併用し、他では得られない知見を発表することができました。これまで毎年のように実験のための渡米をお許しいただいた関係者各位には深謝しております。

その他の面では、昨年度の農学部学務委員長をはじめ、教養部と農学部の教務委員長の他、教務委員、教務専門委員、学生委員、学生生活環境専門委員、化学の入試科目主任や問題作成委員と採点委員、共通教育化学部会の副会長など種々の全学委員や部局内委員を務めました。なかでも1～2日で行わねばならなかった教養部の進

級判定資料確認の手作業や一般入試の化学の採点は、ミスが許されず随分緊張しました。

今後に期待すること

さて今さらですが、これまで化学の講義と実験を担当してきました、教養部化学教室がなくなったデメリットに思いを致しますと、まず化学に関する共通教育（かつての教養教育と理系専門基礎教育）実施の責任体制の弱体化と、日常的に担当教員間で化学教育に関し議論し経験を共有する場がなくなったことが挙げられます。さらに、教養部では1人で毎年8～12コマは担当しており、いち早く可

能だった授業改善のフィードバック、化学の共通教育や入試問題作成に関する実務的情報の継承、参考書や教科書などを完備していた化学図書室の存続、研究室が講義室から離れたため学生の質問への対応、などが困難になりました。これらの問題点については、今後重要性が増すと考えられる理系基礎教育を充実させるため、より改善されていくことを願っております。

最後に、改めてこれまで山口大学でお世話になりました皆様方に深く感謝するとともに、何年かして山口大学が法人化による利点を実感できる大学に発展していることを祈念致します。



ノートルダム大学にて（共同研究者と共に）

英語教育の再考を



中村 幸士郎
教育学部 国際理解教育コース
教授

山口大学には昭和54年着任以来27年、それ以前の私立6年・公立6年を含わせて、計39年の勤務となりました。

共通一次による学力低下

昭和54年に共通一次試験が始まり、解答が記述式からマークシート方式になり、文章表現の訓練不足から、発想力・思考力・論理的表現力の減退が憂慮されました。英文学を専攻する私は、言語の読解力や表現力が人間としての訓練や学習の最重要課題と理解しているため、大学生の学力低下は必定と考え、悲観的な予測を禁じ得ませんでした。その後、受験負担軽減のため受験科目減が進む一方、ゆとりと選択自由度の拡大により「広く浅く」が風靡し、学力低下が雪崩的となりました。

英語力の低下

「英語」は、実用英語の美名の下に、文法・英文の精読・英作文の徹底的訓練が軽視され、英語力が急速に衰えました。共通一次試験以前と現今のテキストを比較すれば一目瞭然です。文科省の学習指導要領によれば、高校の英語習得語彙数は、1800語（中学900語を含む）と激減しました。

入試英語の 広範囲な影響力

入試の「英語」が英語の学力測定だけでない実証例が本学にあります。15年位前、医学部が二次試験の科目削減で「英語」を課さない年が数年間続きました。私の予想通り、医学部の先生方が騒ぎ始めました。学生の授業態度やレポ



ロンドン大学UCLの総長・副学長と共に、
長州五傑の現地取材（筆者：右端）

ート作成に著しい変化が生じたからです。当時の医学部長から電話がかかり、教養部の医学部学生の英語力・授業態度等の変化への気付きや考えを、医学部の教授陣に説明して欲しい、必要なら英語の入試復活を検討したい、との依頼でした。私一人ではと思い、同僚2名と出掛けました。

医学部入試レベルの英語力の習得には、長年にわたる非常に緻密な英語の読解力・思考力・表現力・記憶力が徹底的に訓練されること、英語や日本語はもちろんのこと、大学のすべての分野で要求される高度な教育や研究のための基本的な能力・態度・習慣さらには人間性が訓練されることを話しました。医学部の英語入試は即復活し、工学部も英語の比重を高めました。

バランスのよい 英語教育を

現在、本学の共通教育でTOEIC英語の特訓が進行中です。国際化で実践的英語運用能力がますます必要なため当然の成り行きですが、大学に本来要求される高度な国際レベルの教育や研究のための英語力の訓練も必要です。また、昨今の非人間的事件の頻発からは、教養英語を通して優れた思想や文化に触れ、大学生の時期に欠かせない基本的な人生観や価値観による人間形成を、上記の（医学部の）基本的能力と合わせて熟慮すべきです。広く日本の教育は、「世界人権宣言」の第26条第2項の「教育は人間性の完全な発達に向けられるべきである」を忘れて

はなりません。

思い出の数々

さて、私にとって思い出深いのは、長州五傑の英国留学の現地取材（TV番組制作協力）、日本初の「国際理解教育コース」の設置、学生達との海外研修旅行（体験実習授業の一環）、生雲小・山口大フレンドシップ事業の開始、留学生センターの設置、山口大学・米日財団「アメリカ再発見プロジェクト」（山口ケーブルTV放映中）、各種国際交流事業の推進、等々です。

多くの皆様のお陰で定年退職を迎えることができました。心より深く感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございました。



学生達と海外研修旅行 マレーシア最高裁判所を背景に（平成10年3月）（筆者：左端）



タイの高校生の伝統舞踊 日本国際理解教育学会の研修旅行（平成9年8月）（筆者：右から4番目）

色即是空 空即是色



廣政 登

医学部 総務課専門職員

定年てなあーに。60才で誰のこと。日頃からのんびりだり、ケセラセラと過ごして来た私には現状の実感もなく理解もしてなくて今の時間が漫然と続くと夢想しています。自分を見詰め直す良い機会なのでつれづれに記す。

くぎょうねはん
究意涅槃

新設部署の初代、2代目として仕事をする機会が多く、戸惑い、調整、野次馬根性でシゲキのある刻を過ごし時間が早く過ぎ去ったとの印象が強い。特にこの3年間は仕事の関係で各市医師会、開業医、中小病院へお伺いし責任者とお話をする機会がありました。学外側から見た大学及び病院に対する期待・不満が事務官であり一係長故に出ることが多くあり勉強になりました。その中には直接担当していない事柄も多く担当に関係なく大学を代表していることを実体験しました。大学の改革を行う場合には、通り一遍の委員会等での意見聴衆（管理者同士）では本音がなかなか聞き出せない場合があります。管理者のリーダーシップは重要で必要なことです。その人達（大学）は何時もこの方法、指示、内容が最善なのか自己満足ではないかと自戒を込めて見つめる作業がより大切ではないでしょうか。部外者の小さな声を取り入れることは大変難しいことですがいろんな方法を模索しながら解答を出さないとお先真っ暗

です。それぞれの立場で、only oneを目指して努力、精進されることを望みます。

しんむけいげ
心無罣礙

①昭和44年（23才）頃、

患者さんと窓口でのやり取り
前提：大学病院で外来患者さんの当日の診療料金（薬・検査代等）の計算を行っていた時のこと。

患者「お前の出した薬で俺の具合が悪くなった。どうしてくれる」といきなり怒鳴られる。私「薬は先生が出す。私の所為ではない」と言い返す。係長が飛んできて私は奥へ追い遣られる。夜、居候先の商売をしている姉に言いがかりを付けられたと不満を言うと、姉「私達はお客さんから何時も言われている。そんなことで腹を立ててどうする」と仕事に対する姿勢、心構え、公務員の甘さを厳しく指摘されました。

②昭和44年（23才）頃、

担当係長とのやり取り
前提：大学病院の宿直は2人1組で行う。内1人は、医事課の職員、もう1人は医事課以外の職員。この組み合わせだと医事課の職員の方が3倍位の負担増になる。

私「医事課の若手の職員から不満が出ている。公平にして

欲しい」と担当係長に文句をいう。

担当係長「君の意見は」と聞かれた。勿論、自分も同じ意見だから言ったのだが。発言内容の自己表現方法及び責任の所在の大切さを教えられました。

③昭和53年（32才）頃、

職場でのやり取り

前提：初めての部署、初めての仕事で内容が判らず他の課員（年下）に聞きに行った時。

課員「そんなこと常識でしょう。知らないんですか」と言われ頭にカチン、思わず「お前だって習っていないことは判らんだろう。頭を下げて聞きに来た者に対してそんな態度はないだろう」と宣う。経験年数、年齢

に関係なく習っていないことは判らないし、教えを請うには勇気がいります。人に教える場合は、親切、丁寧に教えることの大事さを身に凍みて実感しました。

以上3件（他にもあり）が反面教師となり仕事に対する姿勢に大きな影響を与えた出来事でした。今日であれば対応も違い周りに迷惑をかけることも少ないと思いますが、いま思い返せば赤面の至りです。一方、このような経験ができたことは、その後の仕事に役立ち感謝しています。

むじょう 無上

仕事のことを第一に考え私利私欲で発言・行動はしていないと自

負していますが周りの人達に正確に認識していただいたかは不明であり不徳の致すところです。死ぬ間際に、過去を振り返り「俺の人生、まあいいか、と諦めができれば良し」と考えています。日々、宮本武蔵の言葉とされる「我ここにおいて後悔せず」をここに。なかなか実行出来ずに年齢を重ねています。いま、此処にいます。此処の位置が良いのか悪いのかまた妥当なのか私には分かりません。ただ、言えることは、仕事・私生活で関わった人達、その人達のお陰で此処まで来ました。42年間を振り返り「まあいいか」と言えることをその人達に感謝いたします。合掌



水前寺公園にて（筆者：中央）

山口大学での20年



福本 哲夫

医学部 人体機能統御学講座
教授

昭和60年2月に山口大学に赴任させて頂いてからあつという間に21年近くがたってしまいました。学生の教育や研究や医学部や大学のいろいろな係をさせて頂いたことが懐かしく思い出されます。昭和60年頃の医学部はカリキュラムでも割とのんびりと、ある意味では雑然となされていたように思います。平成7年に山口大学では大綱化による教養部改組がなされましたがその折にとっても大きな経験をしました。1年間に医学部の学生の2学年を同時に教育する年となったからです。山口大学に入学して教養教育2年目にあたる医学部の学生に医学の専門教育をはじめたわけですが。従来3年生にあたる医学部専門課程1年目の学生にはそれまで医学の専門教育を行ってましたので私たちは解剖学を担当していました。その年はその解剖学の教育を1年間に2学年を同時に教育することになったわけです。当時はこの大変な時期を通り越しさえすればその後はきわめて

安定した医学教育を行う日々がやってくるものとたく信じておりましたが、その後の医学部や全学部にわたるカリキュラムやシラバスの改革の動きは続いてなされたのです。医学部では平成13年度には電子シラバスが確立され授業のなかにパソコンなどが大きな位置を占めることになってきました。

研究の面では臓器のレベルで形態がどのように形成され、維持されていくのかを形態学的に解析しながらその機能についていろいろな方法、例えば細胞の増殖・分化にかかわる分子の遺伝子のメッセージなどをRT-PCR法などを用いて行ってきました。Tリンパ球を作る胸腺という臓器でのTリンパ球産生の機序を、主にそこに存在する胸腺上皮細胞という細胞に着目して解析しました。胸腺上皮細胞こそが胸腺にやってきた未熟な血液幹細胞を成熟したTリンパ球に育てる母親代わりをする細胞なのです。私たちの研究室では主に細胞融合法によるモノクローナル抗体を作成していろいろな細胞の表面分子などに対する抗体を作ってはその発現と臓器での細胞分化や細胞間相互作用におけるそれらの分子の係わりなどについて免疫組織化学などの手法を用いて解析してきました。モノクローナル抗体はHAMとかUBとかという名前とその後に番号を付したUB12とかUB13とかいった具合に名付けて発表してきました。HAMというのは私の前任の土地（浜松）の名と

hepatocyte antigen monoclonals（肝細胞抗原モノクローナル抗体）という意味をかけているつもりです。UBというのは宇部とundifferentiated blood cells（未分化血球細胞）をかけていました。

医学部の学生は大変学ぶことが多くありますが、とても熱心でよく学ぶ学生に恵まれましたことは教育をする立場の者にとりましてはとても幸いでした。医療のなかであるいは医学研究のなかで次の世代を背負って活躍してくれるものと思います。山口大学は山口市と宇部市に大学の地区が分散していることはやはりなんとかうまく調整できればよいと思います。学生や教員が教育をする、あるいは受けるために、また他の学部の先生方と話をするために移動することを余儀なくされます。その割には交通の便（電車など）は必ずしも恵まれていません。テレビ会議が導入され、また授業もそれに近い形のもので動き出していますので、おおいにその間のことは解消されそうですが何とか離れた地区が一箇所に集まることができれば、あるいは小郡など中間の大学地区が出来ればよいのかもしれませんが。総合大学として文科系や理科系などの重要な学部を抱えておりますので、それらがうまく有機的に統合されて教育・研究の面で飛躍できる場が設定されるようになることも意味があることかもしれません。

あっという間の30年間

松浦 満

工学部 機能材料工学科 教授

今から30年前は？

私が、カナダのオタワにある国立研究所より山口大学工学部に赴任したのは、約30年前でした。

同時に新任の工学部教員5、6名といっしょに吉田キャンパスで学長より辞令を貰い、キャンパスが離れていることを実感した最初でした。その頃は、私が定年までいるとしたら山口大学を退職する時は、キャンパスが統合されているか、少なくとも見通しがついているのだと想像していました。

工学部の共通講座で応用物理学実験を工学部全学科の学生を対象（多分350名程度）に、助手、技官などの支援も無く、1人で担当しました。実験内容の見直し、実験機器、テキストの再整備をして欲しいとの話があり、2年程度の間、取り組みました。講座費を少しそのために取っておいたとの事でしたが、大赤字になり、教授の先生に工学部にお願いして貰い、支援をして頂きました。

この体制のままでは大変で、研究が出来ずに潰れると思い、他大学の共通講座の状況も調べたりしました。その時に、併せていろいろ調べて強く感じたことの一つに、共同利用のセンターが山口大学には1つも無いことでした。他大学にはあるのに…と強烈に思いました。

いろいろな人に状況を聞いてみて、山口大学では個々の学部が自分の

ことを中心に考えるのみで、全学的な視点からの思考が基本的に欠けているように感じました。

赴任して30年後の今は？

今もってキャンパスが分かれたままで、統合は難しい状況に感じます。本当は、統合されるのが一番ですが…。それを補うために情報通信のインフラ整備は、メディア基盤センターの久長先生、刈谷先生などの努力とそれをバックアップした歴代センター長など関係者の協力で進みました。キャンパス統合が難しいなら、ユーザー・フレンドリーを旗印にして情報通信のインフラをさらに強力に整備することだと思います。既に山口大学のテレビ会議、遠隔講義、講義室ネットワーク整備を含めてネットワーク活用情報インフラは有名で自慢できるものですが、今後も充実整備・活用し大学の売りの一つとすることを希望します。

共同利用センターは、いくつか設置され、ようやく基本は整備されたと思います。今後は、さらに研究のポテンシャルを高める大学の特色の目玉となるセンターを設置し、頑張って欲しいと思います。

大学全体としては全学的な視点から山口大学を考えることには、この30年間でかなり慣れてきたと思います。でもまだキャンパスが離れていることでキャンパス間の意識の差も大いに残っていますが…。

30年の間に世の中の変化に応じて大学が対応すべきことがいくつか出てきました。そのうちの一つが社会

貢献で、地域共同研究開発センターやエクステンションセンターの活動を含め、現在いろいろな形で活動が行われています。特に、民間との協力や技術移転活動は工学部を中心に積極的に推進され、この関係では山口大学は全国的にも有名です。これをうまく発展させていくことが山口大学として重要と感じます。

個人的には、この30年で山口大学は大学らしい大学にどんどん発展していると思いますし、さらなる存在感のある大学への展開のポテンシャルを持っていると思っています。そこでは、未来への展望を持つてのリーダーシップと教職員の協力、特に、企画などを含め事務職員の活躍が必要に思っており、期待しています。

大学教職員、学生、そして地域の皆様に大変お世話になった30年間でした。ありがとうございました。



研究室で博士号を取得した鄭シンセン大学教授を訪問（筆者：右）（2005年11月）

退職するに当たって



森田 義富
工学部 事務長補佐

はじめに

1年前までは、人ごとのように思われた定年退職がとうとう現実のものとなりました。

山口大学に41年間の長き年月にわたって、お世話様になりました。この間によき先輩、同輩、後輩に恵まれまた知識、経験、人とのつながりなど貴重なものを得ながら仕事ことができましたことに深く感謝いたし、厚く御礼申し上げます。

ある経験

医学部に採用されて1月程経った時に、上司から厚狭（現山陽小野田市）へお客さんを迎えに先輩と一緒にいくように命じられました。その時は、先輩がたくさんいるのになぜ新米者の私が…と思うながら向かいました。着いた所は老人ホームで、ホームとのやりとりで解ったのは学生の実習時に使用される献体（お客さん）の引き

取りでした。それから8年間、この業務にも携わりましたが、この仕事を通していろんな方に接して勉強させていただきました。この希な経験の中から、解剖実習に入る前に学生さんが感謝する意味で献体に合掌することを提案し実行されましたが、それは今も続いているかと思います。

望むこと

私の勤務は、41年間のうち4分の3が医学部・附属病院ということになります。総合大学といわれる山口大学で、もう少し他部局を経験できたらと思っていました。若い方は多くの部署をできる限り経験して、いろんなことにチャレンジされ、そのことが将来充実した仕事につながると思っております。



おわりに

人生のスタートに第一、第二とある時期に節目が付けられますが、これに第三の節目を加える人もいます。第一のスタートは入学した時、第二は学校を卒業して社会人となった時、第三は定年を迎え新しい段階に入った時に区分されています。私も間もなく第三のスタートが始まりますが、これからは少しでも地域に役立つことがあればお手伝いしたいと思っております。

山口大学は法人化されて2年が経過しようとしていますが、法人化の荒波を順調に乗りこなし、教育、研究・地域貢献に向けて大きく前進されております。これからも教職員が一丸となって日本の、いや世界のトップクラスの山口大学に発展されることを願っております。どうもありがとうございました。



私の“宝もの”



山口 静馬

工学部 知能情報システム工学科
教授

私が山口大学工学部に赴任したのは平成4年4月ですから14年間お世話になったことになります。赴任した年には工学部が改組されました。博士課程設置に向けて関係された皆様方のご苦勞の賜物と感謝したものでした。この14年間、文字通り、楽しく意義のある生活を送ることが出来たのは工学部や他学部教職員の皆様のお陰、及び、この間に講義や卒論・修論等を通して接した数多くの卒業生や修了生の皆様のお陰であることは言うまでもありません。ただただ感謝あるのみです。ここでは、お世話になった多くの皆様の中から、特に、工学部における14年間の歳月を通して得ることが出来た私の宝もの“担当させて頂いた私の研究室から巣立った卒業生・修了生の皆さん”に焦点をあてて記させていただきます。

工学部に赴任した平成4年4月は改組によって新設された知能情報システム工学科の1期生が2学年に

進級したばかりの時期でした。この1期生が4学年に進級して卒論生として研究室に配属されるまでには、当然、2年間待たねばなりません。それまで卒論生が全くいないのでは新任教員がかわいそうだとかのご判断の下に、当時の旧電子工学科の先生方がご自分の学科の学生を振り当てて下さいました。旧電子工学科の15期生と16期生でした。この時期の卒論生とは、当時、数も少なく院生もいませんでしたので、学生・教員ともに、よく学びよく遊びました！今思い出しても自然に笑が込み上げてきます！

赴任して3年目から知能情報システム工学科の学生を卒論生として迎えました。他の大学でも同じような傾向にあるようですが、一桁の期の学生は個性が強い反面かなりの団結力もあり協調性に富んでいたように思われます。期が進むにつれて先輩・後輩の縦の関係は勿論のこと同期との横の関係も希薄になってきつつあるように思えます。卒論生や院生の人数が多くなりますとなかなか思い通りには事が運びません。この希薄化傾向の歯止めとして、試行錯誤の結果、修論生と卒論生を組にして修論と卒論を共同で作成してもらうようにしました。このやり方は社会に出てから役に立ったとの評価を頂いたこともあります。

私が大いに驚かされたことが二つあります。一つは平成14年10月23日（水）に催してくれた還暦祝

です。当日は平日でもあり直接参加してくれたのは研究室に在籍する学生のみでしたが、ここに至るまでには、在学生在が卒業生・修了生全員と蜜に連絡を取り合いながら周到に準備されたものでした。会が始まるまで私には全く知られておりませんでしたので、何時ものコンパだろうと暢気に構えて出席して……。感激しました！

他の一つは、平成17年10月9日（日）に開いてくれた退職記念祝賀会です。これまた私には直前まで教えてくれませんでした。卒業生と在校生の約70パーセントの皆さんが出席してくれました。これも、還暦祝の時と同様、在校生が卒業生達と連絡を取り合って企画された完全な手作りの祝賀会でした。方々から馳せ参じてくれた皆さんの懐かしい顔と出会って言葉では尽くせぬ思いをしました！

私は教師になって本当に良かった！私はやっぱり先生稼業が好きなのだ！山口大学工学部にお世話になった私は幸せ者でした！完全に満足して感謝しております！我が人生に悔い無しです！どんなに金と時間を費やそうとも容易には得ることの出来ないもの……。それは人と人との心の絆……。

私が唯一誇れるもの、それは、山口大学工学部における14年間の歳月を通して得た私の宝もの“私の研究室から巣立っていった卒業生・修了生の皆さん”です。

医学部での42年間

山本 加代子

医学部 管理課経理係経理主任

医事課での仕事

高校を卒業した昭和39年4月、当時の県立医科大学附属病院への就職当初は、相談室という落ち着いた事務室でしたが、半年後には受付に変わり、その後入院、収入を経て外来係へ出戻りとなり、通算27年間、殆ど窓口での患者受付業務で明け暮れました。

病院は国立へ移管し、国立病院として、市民病院の病院として患者数はどんどん増え、職員の採用が必要であり、その時期、学校を出たばかりの新人さんの採用が多く、それが外来係へは特に多く、まるで新人養成所の如く、入っては出ていくという状況で、女性はずっと支える人なのでした。この急成長に対して受付の仕事は、昔ながらの手書きで、その上カルテは毎年更新され、この書き換え時の数ヶ月など受付窓口の混雑はす

さまじいものでした。朝から昼過ぎまで缶詰状態でトイレにも立てないくらいで私はよく体をこわしました。その頃、「憲法でも最低限度の文化的生活を保障というのに、文化の“ぶ”の字もない生活」が私の口癖でした。

とにかく、患者として受診するにはある程度体調を整えてからでないとかかれないと思える病院の状況でした。そんな患者さんと共に戦っていたような大変な日々でしたが、それだけ必要とされている、人の役には立っているのよねと思い、長く苦楽を共にしてきた同僚たちと頑張りました。

管理課への異動

大変だった医事電算化導入も軌道に乗って、平成3年4月管理課総務係へ異動となりました。ずっと希望していたものの、すでに記憶力も悪くなり不安でしたが、やはり新しい仕事をすることは新鮮で楽しく、緊張しな

がらも精一杯頑張りました。このときは本当にいろいろな人から激励されたものです。

仕事の内容は照査と臨床試験（治験）契約の手続き全般でした。会計の仕事を知らない私が、用度や経理の書類を見て、それで覚えて照査するという無理な状況の中でしたが、旅費の計算などもなかなか面白かったものです。治験の方も年々契約件数が増え（毎年5割増ペース）、継続契約は新規契約と同じ手続きが必要だったので事務量は増えるばかりで、本当に大変になっていきました。

管理課ではその後大体3年ペースで施設、用度、経理と経験しました。自分の希望も入ったの異動でしたが、希望しつつもやっていたらどうかと不安でもありました。特に会計での4月異動は大変な訳ですが、いつも全く新しい仕事にチャレンジしていた私にはこの異動時の大変さは厳しくギリギリで何とか乗り切りました。とにかく、私にとってはすごい内容と量でした。定年を前にして、法人化が決まりましたが、この一大変化もお陰様で見届けさせてもらいました。

感謝

“人生とは重い荷物を背負い、山道を登るがごとし”これは徳川家康の言だそうです。折々に私の脳裏に浮かんだ言葉であり実感しましたが、山口大学での生活



電算化導入した医事課事務室にて（筆者：右端）

は、私の人生そのものともいえるくらいのものであり、苦しい山道ではあっても、途中では様々な他では見られないような景色も見せてくれ、又可憐な花々もあちこちで咲いていてくれました。

そうして今、私はついにこの山

の頂に辿りつき、ゆったりと心地よい風を全身に感じています。

「よくここまで頑張ってきたね」自分で自分に言います。そして、山口大学に、お世話になった皆様に、思い切り働かせてくれた家人に、”あ・り・が・と・う！！”

と叫びたい気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

最後に、山口大学が益々地域の人々に愛され、発展していきますように、働く人たちが益々健康で、生き生きと働ける職場となりますようにと願っております。



外来係親睦旅行で長崎グラバー邸にて(筆者:二列左端)



あけぼのつつじを訪ねて(筆者:前列左端)

退職記念特集執筆者

職 名	氏 名	職 名	氏 名
人文学部教授	岡 光 一 浩	工 学 部 教 授	山 口 静 馬
教育学部教授	中 村 幸 士 郎	農 学 部 教 授	加 藤 昭 夫
理学部教授	遠 藤 克 彦	農 学 部 教 授	谷 口 仁
医学部教授	岩 本 美 江 子	人文学部・理学部事務長	上 谷 克 弘
医学部教授	福 本 哲 夫	教育学部事務長補佐	末 永 勝 己
工学部教授	池 田 攻	医学部主任専門職員	伊 藤 敏 穂
工学部教授	大 崎 修 平	医学部専門職員	廣 政 登
工学部教授	河 野 俊 一	医 学 部 主 任	山 本 加 代 子
工学部教授	竹 中 俊 介	工学部事務長補佐	森 田 義 富
工学部教授	松 浦 満	農学部事務長補佐	北 野 寛 治

TOPICS

スギ花粉アレルギーに対する経口免疫寛容剤の開発 —JST(科学技術振興機構) 独創的シーズ展開事業に採択—

■ 加藤 昭夫 教授 農学部 生物機能科学科

研究開発の背景

現在、日本人の5人に1人がスギ花粉アレルギー患者であると予測され、その患者人口は今なお増加傾向にあります。このようにスギ花粉症は社会問題化していますが、根本的な治療法はなくアレルギー除去療法や抗炎症剤などによる対症療法が行われてきました。しかしながら、抗炎症剤の投与により集中力の欠如などの副作用があり、根本的な治療を可能にするアレルギーに対する免疫応答そのものを低減化あるいは消失させる方法の開発が望まれています。

新たに開発した方式

私の研究グループではタンパク質と多糖類の混合物を化学試薬なしで、乾燥下で自発的に生じるメイラード反応で共有結合したタンパク質—多糖複合体が形成され、優れた機能を有する複合体に転換することを1990年に発見しました。この複合体はタンパク質を安定化し、100℃に加熱しても不溶化せずに活性を保つことや市販の乳化剤よりも

優れた乳化能力を持つようになることがわかり、食品・医薬産業から注目されました。

私はこの技術のアレルギーの低減化に利用できるのではないかと考えて研究を始めました。アレルギーはすべて抗原タンパク質が原因で起こり、外界と触れる粘膜細胞や腸管細胞には異物が体内に入るのを防御する免疫細胞が張り巡らされています。免疫細胞の中で抗原提示細胞（マクロファージ、樹状細胞）が抗原タンパク質を捕食し、ペプチドに分解し、抗原提示細胞内の主要組織適合抗原（MHCクラスII）が捕食したペプチドと結合し、抗原提示細胞の表面に複合体としてT細胞に抗原提示を行います。T細胞は抗体産生細胞であるB細胞の抗体産生を助ける働きをします。（抗体IgEはアレルギーの原因物質です。）こうしたT細胞はヘルパーT細胞ですが、T細胞にはB細胞に対して抗体産生を抑制するように働くサプレッサーT細胞も存在し、バランスを保ちながら抗体産生、抑制を行っています。アレルギーになりやすい人となりにくい人の違いはこのバランスの相違と考えられます。すなわち、サプレッサーT細胞を働くようにすればアレルギーの低減化、消失が可能となります。



図1 研究室でのスギ花粉収集風景

TOPICS

私たちは全身の30%以上の免疫細胞を有する腸管免疫系がサプレッサーT細胞を誘導しやすいことに着目しました。最近の研究では腸管のT細胞は80%以上がサプレッサーT細胞になりやすいことが明らかにされています。人は一生に約100トンの食物を腸管で処理します。したがって、腸管免疫系はこれらに対応した機能を持っています。赤ちゃんの離乳食への移行は腸管免疫系の未発達な段階から徐々に食物蛋白質に対するサプレッサーT細胞の発達を促し、食物アレルギーを起こさないように工夫されています。この腸管免疫系を用いたサプレッサーT細胞の誘導によるアレルギー症状の低減化を経口免疫寛容と呼びます。スギ花粉アレルギーは経口免疫寛容を誘導することにより、根本的にアレルギーに対する免疫応答を低減化できると考え、研究を開始しました。

スギ花粉アレルギーCryj1-多糖複合体の作成と経口免疫寛容

スギ花粉アレルギー（図2）はペクチン酸リアーゼという酵素蛋白質で植物組織を柔らかくする働きを持ち花粉管が雌の組織を通り、胚珠へと伸張するときに働くと考えられています。このアレルギータンパク質を食用多糖（ガラクトマンナン）を用いて、化学試薬を使用せずに天然に生じるメイラード型の多糖修飾法により、アレルギーの分子表面のe-アミノ基と多糖の還元末端のカルボニル基が結合するアレルギー-多糖複合体を作成しました。このアレルギー-多糖複合体はIgEエピトープをマスクしているため、患者血清中のIgEとの結合性は著しく減少し（図3）、アレルギー患者に経口投与してもアナフィラキシーを起さず、また胃腸でのプロテアーゼ消化を抑制するため、エピトープ部位が分解されずに腸管に到達し、腸管免疫系で吸収されることにより免疫寛容を誘導でき、根本的な食物アレルギーやスギ花粉アレルギーの治療を可能にすることが考えられます。こうした発想に基づき、このアレルギー-多糖複合体をマウスに一定期間経口投与し、アレルギーで感作後に経口免疫寛容が誘導されているかどうかを検討しました。予想したように、スギアレルギーを単独で予め経

口投与しても高い抑制効果は観察できませんでした。アレルゲン蛋白質-ガラクトマンナン複合体を経口投与したラットのIgE産生量は著しく抑制されました。

スギ花粉治療に朗報

この結果をもとにして、スギ花粉の飛散量が例年の10数倍多い2005年3月の2ヶ月前から40日間だけ、ヒト患者ボランティアによる経口投与を試みた結果、花粉飛散量が多いシーズンに80%の患者でアレルギー症状の消失あるいは低減化の効果が確認されました。これまでの5年間の研究から予想された結果ではありますが、スギ花粉アレルギー低減化の劇的な効果が観察されたことに筆者自身も驚いています。幸いにもこの課題が17年度JST独創的シーズ展開事業に採択されましたので、さらに数年間研究調査を行う予定です。今年是全国的に30数名のボランティアの方々に協力していただきました。全国のスギ花粉症患者に朗報となるように、これからも研究を進めていきます。

むすび

本研究を行うにあたって、本学医学部の武藤正彦教授に貴重なコメントならびに多大なるご協力をいただきましたことに深く感謝しています。また、JSTプロジェクト研究の遂行にあたり、杉原美一副学長に便宜を図っていただいたことに感謝いたします。

TOPICS

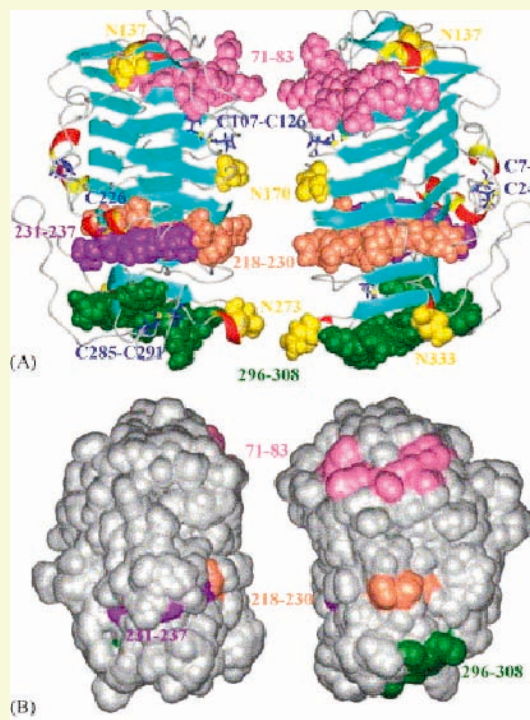


図2 スギ花粉アレルゲンの構造:左右のモデルは180度回転した裏と表の図を示す。
A. アレルゲンCry j 1のリボンモデル構造:抗原部位 (IgEエпитープ) はカラーで示している。1. 71-83 (ピンク色); 2. 218-230 (サンゴ色); 3. 231-237 (紫色) 4. 296-308 (緑色) の4箇所がアレルギー部位。B. アレルゲンCry j 1のスペースフィリングモデル構造で4つのアレルギー部位の表面に露出した構造を示す。カラーはAに対応し、4つの部位はいずれも一部が表面に露出している。

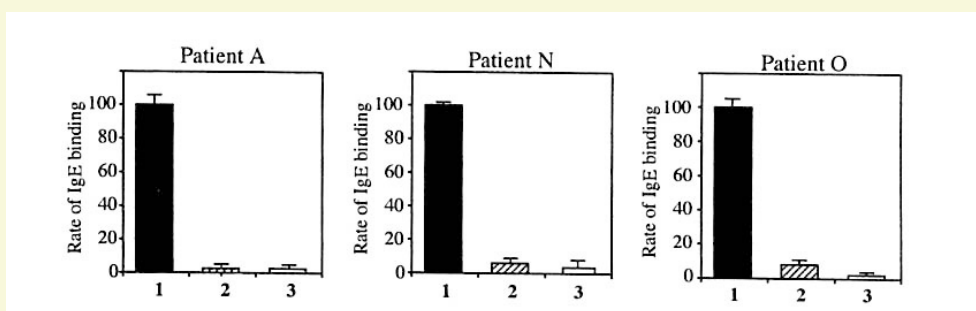


図3 アレルギー患者血清中のIgEとアレルゲンCry j 1および多糖と複合体の反応性
1. アレルゲンCry j 1とヒト血清IgEとの反応性; 2. アレルゲンCry j 1-ガラクトマンナン複合体; 3. コントロール

TOPICS

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 医療系「医工融合実践教育プログラム」

■ 中井 彰 教授 大学院医学系研究科



2005年10月に文部科学省の「魅力ある大学院教育」イニシアティブに係る本学の上記教育プログラムが採択されました。今回、最高学府である大学院教育において山口大学の取り組みが評価されたことで、大学の教育・研究を内外へ発信する良い機会を得たのではないかと考えています。本稿では、大学がこれまでどのように大学院教育に力を入れてきたか、そして本プログラムを通じて今後何をめざすかを中心に紹介させていただきます。

プロジェクト採択の背景

山口大学ではかなり前から独創的な大学院教育に取り組んできました。その一つが、医学部と工学部が連携して学際的な教育・研究を行う試みです。平成13年4月には、日本で初めて医学部と工学部が融合した医学研究科応用医工学独立専攻系大学院を設置し、研究だけでなく融合教育を組織的に行えるようにしてきました。それ以降、日本の中で次々と同様の医工融合型の大学院が設置されてきましたが、多くは山口大学を参考にしています。現在でも、大学院の規模や医学部と工学部の対等な融合という点で抜きん出た独立専攻系大学院といえます。文部科学省の今回の事業は、創造性豊かな若手研究者を育成するための独創的で実質的な大学院教育を支援するのが狙いであり、私たちの方向性と一致していました。

医学と工学の融合教育の模範を示す

応用医工学大学院のカリキュラムは、講義、演習、そして特論と展開研究コースの三つの柱からなります（図1）。「融合教育」がすべての根底にありますので、講義では最初の基本的な知識の習得をめざすもの以外は、医学系と工学系の大学院生が同じ講義を受けます。それにより医工学関連の研究討論などに必要な幅広い知識を習得します。演習では、少人数に分かれて臨床現場の体験や医用・分析デバイスを扱う体験をします。これらを通じて、医学部出身の大学院生は、臨床と密接に関わる医療機器の開発に関する基礎的、あるいは応用的な新しい問題意識を喚起するのがねらいです。また、工学部出身の大学院生は、医療ニーズを知るとともに、医学・生命科学への興味をかき立ててバイオの研究分野を強く意識させることをねらっています。中でも手術現場の体験は最も強い感銘を与えています。一方、この融合領域の研究を支えるのは、純粋な医学・生命科学研究であり工学研究です。当然、そのような分野の研究を指向している大学院生の知的満足度も高いカリキュラムであると考えています。いずれにしても、このような融合型のカリキュラムはきわめて特徴的であり、高く評価されています。

大学院生の自立性と国際性を養う

独立専攻が立ち上がって3年で、講義や演習については確立してきました。今回、この教育プログラムの予算措置によって私たちが最も力を入れているのが、大学院生の「自立性と国際性」をめざす取り組みです。展開研究コースの中で、海外や国内研究機関への短期インターンシップを財政的な支援により積極的に推進します。大学院生は、

T O P I C S

自分で研究機関と交渉し、研究打ち合わせや技術的な習得をめざして短期の研修を企画します。海外での研修は英語での討論が不可欠ですので、その準備として特論の中で専門領域に関する英語の討論の経験を積みます。また学内に英会話教室を設けて語学力の向上のための支援も行います。このような取り組みによって、幅広い視野を持った自立性のある人材育成をめざします。私たちは、山口大学の大学院生の意識がこれまでと大きく変わることを心から願っています。

大学院教育の将来像

山口大学は、中期計画・中期目標において最重点項目として医工学をあげています。全国的にも、今回の文部科学省の事業で医工融合型の教育プログラムが採択されたのは本プログラムのみです。したがって、応用医工学系専攻は山口大学の教育・研究の牽引となるだけでなく、日本の医工融合型

大学院の良い模範となるように今後も努力が必要だと考えています。

今回の文部科学省の事業で、全国で97件の教育プログラムの採択がありましたが、医学系の研究科からはわずかに8件の採択にとどまっています。医学部を中心とする大学院教育は歴史的にも独創的な改変は難しい状況にあります。それにもかかわらず山口大学では、医学系研究科を中心として医工融合領域を成功させました。来年度は、さらに理学部と農学部とも融合して応用分子生命科学独立専攻系の設置が決まっています。このように時代を先取りした改革を得意とするのは、山口の風土に育てられた医学部、ならびにすべての理系学部の教員の懐の深さでしょうか。

学内連絡先

TEL:083-22-2214(プログラム事務局)

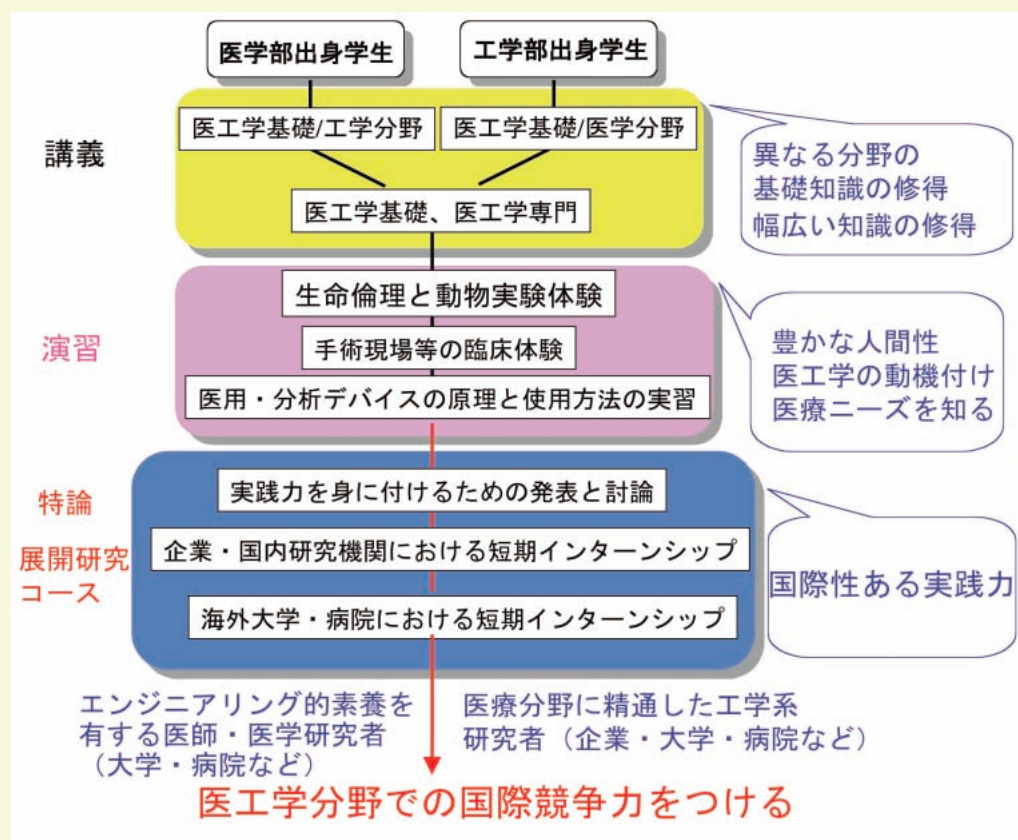


図1 カリキュラムの内容と目的

TOPICS

7回目を迎えた 「山口大学理学部サイエンスワールド」

■ 野崎 浩二 助教授 理学部物理学講座
理学部サイエンスワールド7th実行委員長

サイエンスワールド7th

毎年恒例の山口大学理学部サイエンスワールドが11月6日（日）に山口市湯田温泉のカリエンテ山口（山口県婦人教育文化会館）にて開催されました。2000年に初めてサイエンスワールドを開催して以来、今回は7回目にあたることからその名称を「サイエンスワールド7th」としました。当日はあいにくの雨にも関わらず、多くの小中学生や高校生、そして一般市民の方々にご来場いただき、サイエンスワールド7thは大盛況に終わりました。



サイエンスワールド7thメイン会場

過去のサイエンスワールドを振り返って

理学部の若手教員有志の発案により1999年3月に開催された「先端科学フェスティバル」がサイエンスワールドの前身行事です。先端科学フェスティバルは、子供たちの理科離れになんとか歯止めをかけよう、さらに地域社会に対する知名度が当時今ひとつだった山口大学理学部から積極的に情報発信することにより一般市民の方々に理学部の存

在をもっとアピールしようという趣旨で企画されました。そして、その趣旨が理学部全体で認知され、次年度、理学部主催行事として第1回のサイエンスワールドが2000年3月に開催されました。先端科学フェスティバルでは、現在のサイエンスワールドのメイン企画である科学に関する展示・実演・体験コーナー以外に、中高生へ体験実習ツアーの参加募集を行い、会場から大学までバスで参加者を輸送して体験実習を行いました。100名を超える参加者がありました。開催に要する経費は先端科学フェスティバルと第1回のサイエンスワールドに関しては文部省（当時）に申請した「理工系教育推進経費」が認められました。最近開催のサイエンスワールドの経費は外部資金や理学部の予算で賄ってきました。

2002年度の第4回のサイエンスワールドでは、初めての試みとして、秋から一定の期間、山口市内の複数の小学校へ数回出張する形式で開催しました。この方式での開催については、特に、市の中心部から離れた地域の小学校には好評でした。ただ、小学校の施設の休日使用等、さまざまな課



展示ブースと出展スタッフ

TOPICS

題が残りました。結局、2003年度の第5回からは再び市内の会場を1日間借りて開催する形式に戻りました。関係者のさまざまな努力の甲斐あってサイエンスワールドは今では山口市民の間に知れ渡った行事となりました。

「サイエンスワールド7th」での新たな試み ～サイエンスセッションU18の開催～

今年度開催したサイエンスワールド7thは、例年の3月の開催を見直し、気候がよくて参加者増の見込まれる11月に開催することにしました。企画については、毎年好評を得ている身近な科学の体験コーナーと特別講演、特別展示を行うことを最初に決定しました。これらの企画は、市民の皆様方には毎年の山口大学理学部サイエンスワールドのメイン企画としてすでに認知されており、子供たちや一般市民の皆様の期待は大きく、サイエンスワールドの開催趣旨を考えると継続すべき企画であることは言うまでもありません。しかし、そろそろ新しい企画でサイエンスワールドに新鮮味を出し、子供たちや一般市民の方々に今まで以上にサイエンスに興味を持っていただきたい、さらに小学生とその保護者中心の来場者の層を中高生にまで広げたいという意見が実行委員会で見出され、新たに18歳以下の科学研究発表コンテスト「サイエンスセッションU18」を開催することにしました。当初、参加応募が少ないことが危惧されましたが、山口県教育委員会や山口大学が協力機関となっているスーパーサイエンスハイスクール（SSH）認定高校のご協力などがあり、おかげさまで中学生グループ1組を含む8組の応募がありました。

8組とも発表内容はすばらしいものであり、感心

させられるものばかりでした。どれも甲乙つけがたい発表でしたが、上位4組には理学部長から表彰状が送られました。最優秀賞には山口県立厚狭高等学校生物部のグループが、そして、奨励賞には、唯一の中学生グループ、山口市立平川中学校のグループ、他1グループが選ばれました。

サイエンスワールド終了後に、各学校の教諭からこの企画に対してとてもよい評価をいただき、今後引き続きの開催を強く要望されました。中高生にとっては、自分たちの研究成果を人前で発表すること、さらには、他の学校の発表を聞くことが、とてもよい経験になったようです。新企画サイエンスセッションU18は教育に関する高大連携が叫ばれる中で、新しい形の地域貢献事業と言えるでしょう。サイエンスワールドと共に、サイエンスセッションU18も今後継続して開催していく必要性を強く感じます。



増山理学部長から表彰される厚狭高等学校の生徒

学内連絡先

TEL : 0836-933-5679

E-Mail : nozaki@yamaguchi-u.ac.jp

T O P I C S

医学部分子脈管病態学講座で 世界初の大動脈瘤の薬物治療に成功

青木 浩樹 助教授 医学部 分子脈管病態学講座

研究成果

大動脈瘤の原因となる分子的異常が世界で初めて解明されました。この異常は薬で是正可能なので、病的血管の治癒力を高め、大動脈瘤を縮小させるという新しい治療法開発への道が開かれると期待されます。

大動脈瘤という病気について

大動脈瘤は、体の中で一番大きい血管である大動脈が弱くなり、血圧により次第に風船のように膨らみ、ついには破裂して出血死に至る病気です（図1）。破裂前にはほとんど症状はありませんが、自然に治ることはありません。現在の治療法は、破裂する前に動脈瘤を人工血管に入れ替える手術です。国内で年間約8,000例の手術が行われ、その死亡率は2～4%と言われています。破裂した場合は、緊急手術が間に合っても50%前後の高い死亡率となります。

大動脈瘤の原因は、あるタンパク質分解酵素の働きで血管壁が弱くなり、血圧に負けてしまうためだと考えられています。そのため、大動脈瘤に

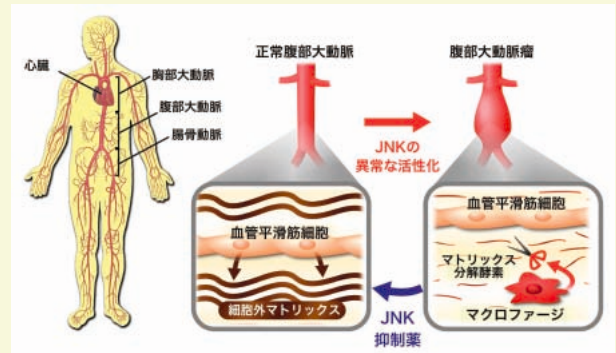


図1.大動脈瘤の分子メカニズム

正常大動脈では血管平滑筋が細胞外マトリックスを作っていますが、大動脈瘤では異常に高まったJNK活性が細胞外マトリックスの分解を促進し、生合成を抑えています。実験的に大動脈瘤を作ったマウスにJNK抑制薬を投与することにより、大動脈瘤を小さくすることができました。

対する薬物療法として、このタンパク質分解酵素の抑制薬が欧米で試験的に使われていますが、動脈瘤の拡大、進行を遅くするに止まり、十分な治療効果はありません。

破裂の危険は、動脈瘤が小さい間は低く、小さくなると急速に高くなります。小さな動脈瘤の進行を遅くする治療は、破裂の危険が高くなるのを予防できると期待されます。しかし、破裂の危険が高い大きな動脈瘤では、進行を遅くするだけでは充分ではないので、手術をして根治するのが従来の治療法でした。手術をせずに治療するためには、一旦大きくなった動脈瘤を小さくする必要がありますが、大動脈瘤を薬で小さくすることは、これまで不可能だと思われていました。

研究の概要

今回の研究により、細胞の中で情報を伝えるJNK (c-Jun N-terminal kinase)と呼ばれる分子の働きが異常に高いことが、大動脈瘤の原因であることがわ



医学部分子脈管病態学の講座スタッフ
（前列中央：松崎医学部附属病院長、前列左端：筆者）

TOPICS

かりました（図1）。

動脈瘤では、血管壁を作るコラーゲンやエラスチンといったタンパク質（細胞外マトリックス）の分解が異常に高まっていることと、細胞外マトリックスの生合成（血管の治癒力）が低下していることの両方が、病気の成り立ちに関わっていると考えられます。これは、マクロファージと呼ばれる細胞から分泌されるマトリックス分解酵素が異常に増えると同時に、血管平滑筋細胞のマトリックス生合成酵素が減っているためであることがわかりました。

さらに、異常に働きの高まったJNKが、マトリックス分解酵素を増やし、生合成酵素を減らしている原因であることを突き止めました。JNKの働きを薬で抑えると、マトリックスの分解が抑制されると同時に生合成（治癒力）が回復することにより、血管壁組織の修復がおこり、一旦できた大動脈瘤が縮小することが証明されました（図1）。

今回の研究は動物（マウス）実験によるもので

すが（図2）、今後の臨床応用に向けて、JNKのより良い抑制薬や投与法の開発を進めています。これにより大動脈瘤に対する治療法選択の幅が広がることが期待されます。この研究成果は、実験医学研究学術誌で世界最高位にランクされるNature Medicine誌の2005年12月号に掲載されました（図3）。

掲載論文

Regression of Abdominal Aortic Aneurysm by Inhibition of c-Jun N-Terminal Kinase

「c-Jun N-terminal kinaseの抑制による腹部大動脈瘤の縮小」

Nature Medicine 11:1330 (2005)

学内連絡先

TEL：0836-22-2361

E-mail：haoki@yamaguchi-u.ac.jp



図2. マウス大動脈瘤の超音波検査

論文第一著者の吉村耕一（助手）と大石恵美（技術補佐員）がマウス大動脈の超音波検査をしているところです。

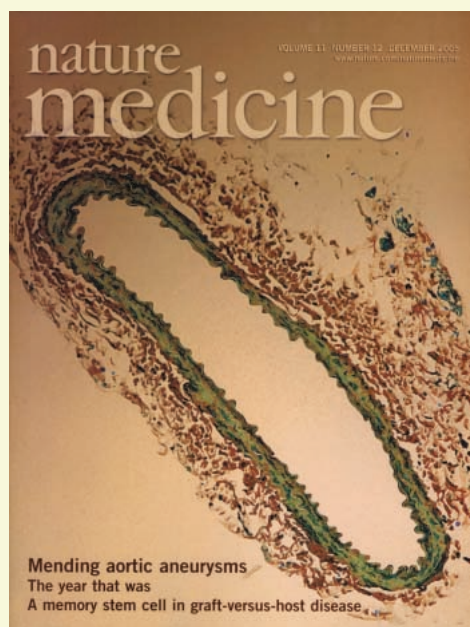


図3. Nature Medicine 2005年12月号表紙

本研究はNature Medicineの表紙にも取り上げられ、世界的な注目を集めています。この表紙写真は、JNK抑制薬で治療したマウス大動脈瘤の組織写真を示しています（資料提供 nature publishing group）。

TOPICS

第21回企画展 「古墳の世界～山口県古墳を探る～」を開催

■ 横山 成己 助手 学術情報機構 埋蔵文化財資料館

山口大学の地下には「遺跡」が眠っています

山口大学の県内5カ所のキャンパス（山口市吉田地区、山口市白石地区、宇部市小串地区、宇部市常盤地区、光市光地区）は、いずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地」上に立地しています。「周知の埋蔵文化財包蔵地」とは、法律用語のため難しく感じられるかもしれませんが、要するに「遺跡」のことを示しています。このため、山口大学内で地面の掘削を伴う開発工事などが行われる場合は、遺跡を保護するための発掘調査が必要となります。山口大学埋蔵文化財資料館は、学内での遺跡の発掘調査を担当している組織なのです。

地域に根ざした特色ある展示

山口大学埋蔵文化財資料館は、国立大学法人内では唯一「資料館」という名称を掲げる学内遺跡の調査組織です。したがって、遺跡を調査するだけでなく、その成果を学内外に広く公開することも私たちの大きな役割の一つです。資料館は、山口大学内の遺跡から出土した実物資料（土器や石器など）を常設展示として公開していますが、これとは別に年に1回、山口県内の埋蔵文化財を素材とした企画展を開催しています。

「山口県古墳」を探る

第21回を迎えた今年度の企画展は、「山口県古墳」をテーマに、平成17年11月5日から平成18年2月24日まで開催しました。

「古墳」は、皆さんにとって最も親しみのある遺跡の名称ではないでしょうか？ 多くの人は「古墳」と聞くと、歴史の教科書に掲載されているような鍵穴形をした巨大な古墳（前方後円墳）を思い浮かべることと思います。では、実際に古墳を見学したり、古墳から出土した様々な遺物を目にしたことはありますか？

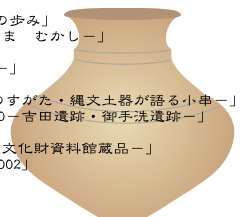
実は、古墳とはそれほど特殊な遺跡ではなく、しばしば私たちの身近にひっそりと埋もれているものなのです。現在山口県内で確認されている古墳は、推定地を含めるとおよそ400基から500基を数えます。これに未発見のものを加えると、おそらく1000基近い古墳が存在するものと考えられます。

そこで今回の企画展では、古墳をより身近に感じていただくため、「どのような墓を古墳と呼ぶのか」「古墳にはどのような形のものがあるのか」「古墳には何が副葬されているか」「埴輪にはどのような種類があるのか」などの問題に対して、山口大学吉田地区が所在する吉田遺跡の古墳時代関連出土遺物とともに、県内の著名な古墳から出

埋蔵文化財資料館が過去に開催した企画展

昭和63年度 さわってみる歴史第1回「土から生まれた容器」
昭和63年度 さわってみる歴史第2回「古代人が信じたもの」
平成元年度 さわってみる歴史第3回「不思議の国のミュージアム―学内発掘10年の歩み―」
平成元年度 さわってみる歴史第4回「不思議の国のミュージアム vol.2―学内発掘10年の歩み―」
平成2年度 さわってみる歴史第5回「古代人の生産活動―海・山・陸―」
平成3年度 さわってみる歴史第6回「うつわの一生―その誕生から廃棄まで―」
平成3年度 さわってみる歴史第7回「出土品にみる地域間の交流」
平成4年度 第8回企画展「よみがえる吉田遺跡―吉田遺跡第1地区の調査から―」
平成5年度 第9回企画展「発掘調査速報展」
平成6年度 第10回企画展「ガラス小玉を身に纏った時代」

平成7年度 第11回企画展「山口大学 発掘調査45年の歩み」
平成8年度 第12回企画展「吉田遺跡展―発掘調査 いま むかし―」
平成9年度 第13回企画展「学内発掘20年の歩み」
平成10年度 第14回企画展「学内発掘20年の歩み―2―」
平成11年度 第15回企画展「山口大学発掘調査概報1999―古代の吉田のすがた・縄文土器が語る小串―」
平成12年度 第16回企画展「山口大学発掘調査概報2000―吉田遺跡・御手洗遺跡―」
平成13年度 第17回企画展「出土品に見る山口県古墳―山口大学埋蔵文化財資料館蔵品―」
平成14年度 第18回企画展「山口大学発掘調査速報展2002」
平成15年度 第19回企画展「吉田遺跡と平川の遺跡展」
平成16年度 第20回企画展「古代の周防国」



TOPICS

土した実物資料を用いて、より具体的に古墳について学習できる展示を心がけました。入館者からは、「山口県出土品には特に感動する」「いろんな種類の副葬品を見れてよかった」「山口大学にこんな遺跡があったと知って驚いた」などの感想とともに、「なぜ古墳がその場所に造られたのかを知りたい」「埴輪にはなぜ穴があいているの」といった質問の声も数多く届けられました。私たちにとても、古墳について色々と考えるよい機会となりました。

お知らせ

埋蔵文化財資料館は3月中展示替えのため休館しています。4月からは常設展として「山口大学の遺跡～吉田遺跡展～」を開催します。

私たちは、今後も地域の埋蔵文化財を素材とした特色のある展示を行おうと考えています。是非一度足をお運びください。

学内連絡先

TEL/FAX：083-933-5035

E-mail：yuam@yamaguchi-u.ac.jp



企画展の展示

TOPICS

第4回キャンパスベンチャーグランプリ中国にて 本学学生2グループが部門優秀賞を受賞

■ 藤井 文武 助教授 大学院ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー教育研究施設



山口大学における取り組み

大学院ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)およびビジネス・インキュベーション施設(YUBIS)では、学生のチャレンジ精神を鼓舞し自己開発能力を育むという観点から平成16年度より学生のアントレプレナーシップ育成に着手、参加学生が持ち寄ったビジネスアイデアを題材とし、設定した目標の実現に向けて努力する過程において自主性・積極性や未知課題への対応能力を引き出すことを目的に「起業体験プロジェクト」と銘打った実践型教育プログラムを実施しています。2年目となる本年は、年度当初にキャンパスベンチャーGPへのプラン提案を目標として提示、興味を示して参加を宣言した学生が複数グループを形成して、前田禎彦・YUBIS起業マネージャーの指導の下自らのプランのブラッシュアップ活動を行ってきました。プラン提出の締め切り目前の時期には夜遅くまで弱点の克服や訴求力の向上を目指して作業を行うなど各人がそれぞれに努力して、最終的に5グループがプランのとりまとめを達成して応募にこぎつけました。

受賞報告

中国地域の学生のビジネスに対する意識を高め、起業家精神を鼓舞し、創造性・チャレンジ精神に飛んだ人材を育成することを目的に、「第4回キャンパスベンチャーグランプリ中国(CVGP中国)」(主催：キャンパスベンチャーグランプリ中国実行委員会、共催：中国経済連合会、中国地域産学官コラボレーション会議、中国産業人クラブ、日刊工業新聞社)が開催されました。山口大学からは5件の提案を行いました、そのうちの以下の2件の提案が、それぞれの部門において優秀賞(賞状および賞金20万円)を受賞致しました。

【情報通信部門】

「携帯電話を利用した新たな広告サービス」

蘆田岳史(大学院理工学研究科)

西田俊勝(大学院理工学研究科)

倉田恭平(大学院理工学研究科)

【環境・健康・福祉部門】

「花粉症サプリメントの生産と販売」

青木理恵子(大学院農学研究科)

池田周平(農学部)

近澤咲子(農学部)

表彰式典

本年度の第4回CVGP中国には、中国地方の大学・大学院・高等専門学校に所属する学生から総数104件の応募がありましたが、書類審査を通過してプレゼンテーション審査を受けた提案の中から上記の2件を含む12件が受賞の栄誉を受けることとなりました。表彰式は平成18年1月31日に広島市内で開催され、本学からはプラン提案を行った学生に加え山本節夫教授(本学VBL/YUBIS施設長)と前田マネージャも参加、受賞者の栄誉を祝しました。

TOPICS

加藤学長への受賞報告

受賞学生は2月27日に山本VBL施設長、吉田貴久夫YUBIS施設主任とともに加藤紘学長への受賞報告を行い、歓談の時間を持ちました。それぞれのグループの学生は学長に提案の概要や受賞の感想

などを報告、これに応じて加藤学長は、受賞の榮譽を祝すとともに、次のステップに進むために一段高い視点を持つことの重要性を自らの経験談とともに学生に伝えられました。



CVGP授賞式での一コマ



加藤学長（左から3番目）、山本施設長（右端）と受賞学生諸君

今後の活動について

ともすれば閉塞感が漂いがちな現代において、今後大学を卒業する学生にはその閉塞感を打破しイノベーションを成し遂げる意思と行動力、および未知なる問題に対しても怯まず、必要な能力を身に着けつつ自己開発しながら問題解決を達成する力などの素養が強く求められるものと考えます。それは自らがベンチャー企業を起業する場合だけに必要なものではなく、私たちはむしろ企業組織に就職して働く大多数の学生にこそ重要な素養に

なると考えています。山口大学VBL/YUBISではこのような観点から、今後もアントレプレナーマインドを有する学生を育成することを目的に今後もキャンパスベンチャーGP中国をはじめとする各種コンテストへの学生の参加を奨励・支援するとともに、自己開発力を有する学生を育てる教育プログラムの開発を目指して各種の試みを行っていく予定です。引き続き山口大学VBL/YUBISの活動へご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

学内連絡先

大学院ベンチャー・ビジネス・
ラボラトリー教育研究施設

TEL/FAX：0836-85-9850

E-mail：vbl@yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

「第4回 東北大学男女共同参画シンポジウム」
に参加して

■ 松原 幸恵 講師 教育学部 社会科教育講座
イコール・パートナーシップ委員会男女共同参画WG委員

はじめに

昨年11月26日に仙台国際センターにて開催された東北大学及び同大学男女共同参画委員会主催による第4回「東北大学男女共同参画シンポジウム」に参加してきました。同シンポジウムは、2002年より毎年開催され、第1回シンポジウムにおいて創設された、東北大学「男女共同参画奨励賞」（沢柳賞）の授賞式及び受賞者発表会も兼ねて行われてきているものです。シンポジウムに先立って行われた同賞受賞講演では、研究部門、活動部門、プロジェクト部門と多方面からの成果が報告され、男女共同参画に対する意欲的な取り組み姿勢を感じました。

さて、今回のシンポジウムのテーマは、「どこまで進んだ大学の男女共同参画」というもので、一般市民の参加も受付けており、230人もの参加者が集まるほどの盛況ぶりでした。また、出席者への配慮として託児所が設置されているのも印象的でした。

基調講演

基調講演は、大沢真理氏（東京大学社会科学研究所教授）による、「大学の男女共同参画と学術の発展」と題されたものでした。同氏は、日本における男女共同参画の政策決定に携わってこられた経済学者です。講演では、まず、1999年のユネスコ世界科学会議で採択された「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」において、持続可能な世界の実現にむけて科学の果たす役割が強調され、その一環として科学へのアクセスの平等性、つまりは学術における男女共同参画が科学の発展にとつ

て非常に重要であるとされたことが紹介されました。ひるがえって日本に目を向けてみると、日本的経営や日本型雇用システムといった従来の社会・経済システムの行き詰まりが現在の構造改革を生み出す一因となっているけれども、日本における性別分業の程度は依然先進国の中ではかなり高いということが統計結果から明らかにされました。そして、そのことが科学技術や学術といった知識社会における担い手の固定化（ジェンダーや年齢等において）を生み出し、その多様性を失わせている、つまり次代の知識社会のすそ野に危うさをもたらししているということが指摘されました。さらに、その傾向は小・中等教育よりも高等教育（特に大学）に顕著で、専攻分野の偏りなどにおいて際立ったジェンダー格差が見られ、その是正について大学の果たすべき役割は非常に大きいことが述べられました。

パネルディスカッション

基調講演の後、「大学の男女共同参画—現状と課題」と題して、基調講演者の大沢氏のほか、名古屋大学、秋田大学、早稲田大学、東北大学の男女共同参画推進活動担当者らによるパネルディスカッションが行われました。パネリストにより各大学における男女共同参画の取り組みが10分程度で紹介された後、各地の大学で男女共同参画推進に携わるフロアの出席者（愛知教育大学、東京工業大学、一橋大学、山口大学）にも発言の機会が与えられました。私も、山口大学での取り組み（制度的整備状況等に関する実態調査とその後の方針、育児休業等の両立支援策の推進、など）について、数分程度で簡単な報告を行いました。

各大学の活動紹介の後、大学における男女共同

T O P I C S

参画の現状と今後の課題についての討論が行われました。その要点は次のようなものでした。1) 男女共同参画のための学内における組織・体制のあり方や、学内外における活動について、2) 大学構成員のジェンダー格差の現状（先進国の中では極めて低水準）と、ジェンダー・バランス確保のための有効対策（例えばポジティブ・アクションの功罪など）について、3) 育児休業・保育園の設置等の両立支援策の現状、及びハラスメント対策との関連などについて、4) ジェンダー教育・研究奨励について、などです。これらさまざまな観点から、フロアも交えて活発な議論が展開されました。

結びにかえて

シンポジウムは大変盛り沢山な内容でした。それだけ大学における男女共同参画の問題は山積しているということだと思います。今回参加できただけでも大変有益でしたが、もう少し討論の時間があれば、より理解が深まったのではないかという印象を持ちました。

また、今回のシンポジウムには各地の大学関係者が多数参加しており、それぞれの状況を聞くことで、各大学における男女共同参画の取り組みは段階・規模に応じて非常にさまざまであり、それぞれの抱える課題も多種多様であることがわかり

ました。そして、それぞれの大学での事情は異なりますが、各大学単独での取り組みにも限界があり、他大学との情報交換や連携が男女共同参画推進にとって有益なものとなってゆくであろうことも感じられました。

なお、上記のこととも関連しますが、今回のシンポジウムの最後に、「大学等における男女共同参画を推進し、ネットワークを構築するための呼びかけ」案が提起されました。それを簡単にまとめると、つぎのようなものです。1) 総合的な知の拠点としてとしての大学等には、男女共同参画社会の実現に必要な諸分野の研究・教育を推進する責務があり、諸課題に向けて多方面にわたる積極的な貢献が求められ、そのための効果的かつ具体的な措置を講じる必要がある。2) そうした取り組みを促進するため、大学等の間にネットワークを構築し、大学及びその機関、教職員・学生等がともに協力して取り組んでゆくことを呼びかける。

こうした動きに対し、本学イコール・パートナーシップ委員会も賛同してゆくことになりましたことを最後に付記して、結びにかえたいと思います。

学内連絡先

Tel : 083-933-5326

E-mail: yukiem@yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

留学生学友会

山口大学のサラダボールを作ろう！

リ カイハ
李 海波 留学生学友会会長

山口大学には現在28カ国からのおよそ300人くらいの留学生が在籍しています。違う国からやってきた留学生たちは山口大学に新しい血液を注ぎ、山口大学のひとつの特別な風景にもなっています。留学生たちにとって、勉強と研究はもちろんのこと、日本の風習にしっかり馴染み込むことも日本での生活に欠かせないことです。そのため、おとしの9月、山口大学に在籍している留学生の生活を支援し、さらに、山口大学の国際交流を促進するために、山口大学留学生学友会（Yamaguchi University International Student Association）略称：ユースー（YUISA）が山口大学国際センターの協力と指導のもとで、発足しました。

国際センターの宮崎センター長は、ユースーの発足準備会で、国際交流はみんなを同じであるようにするのではなく、みんなの味が保てるサラダボールのようなものであるといいました。つまり、違う文化は違う野菜のようなものであり、それぞれの野菜の味を消すのではなく、その味をうまく引き出し、うまく調和することのできるものが国際交流というサラダボールの役割です。この言葉はわれわれの大きなヒントとなり、山口大学でどういうサラダボール作ったらいいのかとわれわれは考えてきました。その結果、山口大学で留学生たちは自分の国を紹介することのできる“インターナショナルカフェ”を作ることにしました。さらに、日本人学生たちが外国語の練習もできる“外国語コーナー”もカフェの中で設けることも決めました。この考えは山口大学の先生方に大いに協力していただき、大学会館に長年使われていなかった一室（生協ブックセンターの隣）を使わせてもらう許可もいただきました。さらに、われわれのこのプロジェクトに「おもしろプロジェクト」の経済的な支援もいただくことになりました。準備万端整っ

たとしかほか言いようがありませんでした。

しかし、ユースーカフェの開業準備はわれわれの予想したとおりにスムーズにいくものではありませんでした。ユースー主要メンバーの卒業、カフェ経営の無経験、内部意見の不統合、リーダーの突然の辞職などいろいろな問題がわれわれの前に横たわっていました。結局数ヶ月遅れで11月の末にやっと開店できる方向に向かって、軌道に乗り出しましたが、ユースーカフェの昨年は5回の営業で終わりを告げました。この5回の営業に多くの留学生が訪れましたが、日本人学生はユースーカフェの外で立ち止まる人もいましたが、こちらから誘ってもなかなか入って来てくれることがありませんでした。ユースーカフェの展開はわれわれが思っていたような簡単なものではないと実感しました。中国に「万事開頭難」ということわざがあり、「物の第一歩を踏み出すのが困難である」という意味です。山口大学でおいしいサラダが作れるサラダボールを作るという新しい試みも第一歩を踏み出さないと前に進むことができません。

ユースーカフェは「おもしろプロジェクト」の支援で昨年コーヒーメーカーを準備しました。これを使って皆さんにおいしいコーヒーを提供したいと考えています。今年のユースーは昨年の教訓を生かし、本年度の5月からユースーカフェの年にしたいと考えています。また、ボールの中のサラダをもっとおいしく作るためには、ユースーカフェで定期的に文化理解などの交流活動も行うという考えもあります。ユースーは日本の皆さんとともに山口大学で素敵なサラダボールを作り出していきたいと思います。ぜひご協力ください。ユースーカフェは山口大学以外の関係者、社会人、高校生などにも公開しますので、ご利用ください。

ちなみに、山口大学留学生学友会はほかに留学

T O P I C S

生の生活を支援するということもしています。物価の高い日本での生活は多くの私費留学生にとって、びっくりさせられるだけではなく、大変なことです。卒業生の皆さん、そして先生の皆さんはもし要らない電気製品や家具などがありましたら、ぜひユーザーにご連絡ください。

ユーザー生活部：連絡先
マンチイチュン(連合農学研究科博士課程)
田間耕(経済学研究科)
Email:yuisateam@hotmail.com



ユーザーカフェの営業風景

TOPICS

異文化交流講演会

第12回異文化交流講演会「義」の中国史の講演を聴いて

たけなみ

武濤 朋子 人文学部中国哲学研究室 3年

現代の日本社会において「義」を動機に行動する者は少ない。「義」という精神を教えられた経験のある者もまた少ないであろう。中国思想、あるいは日本思想でもそうかもしれないが、それらを学び「義」について触れる機会のあった者ですら、「義」の実践としての歴史を知る者は少ないかもしれない。事実、私自身もまた、中国哲学研究室に所属する身ではあるが、「義」についての知識は、いくらかの思想家の中に見えるソレについての解釈だけであった。その状況の中で、「義」の精神について、またその歴史についてこの講演会で聞くことが出来たことは、極めて貴重であった。



講師を務めた谷川道雄京都大学名誉教授

「義」の精神は、古代の思想家の中から始まり、近・現代に至るまで引き継がれており、実践のされ方の違い、また実践される場面に置いて多少ニュアンスの違いはあっても、基本的には人間の行為の動機となるに値する重要なものであったようだ。

「義」とはそもそも何であるのか？その説明で強調された所とは“自己の利を離れる”ということであった。実際に「義」の精神が見出せるであろう歴史を振り返るならば、その説明はその通りであるように思える。しかしながら、「義」の精神を説明する際、「義」を「義」として認めうる部分をどこに求めるかを考える際、注目すべきはむしろ別の部分ではないだろうか。

講演会の中でも主題に置かれていた自他の関係。その中において“自己の利を離れる”という何かに対しての消極的方向性を「義」の本質として強調するのではなく、“他者の利を実現する”という積極的方向性、それを「義」が「義」たる部分として強調するということである。“自己の利を離れる”ことと、“他者の利を実現する”こととは決して同じ意味ではない。“他者の利を実現する”こととは、時に“自己の利を実現する”ことと両立し得るからである。

例えば、「義」で結ばれている共同体が、その共同体の外から見た時、共同体自体の利を追求しているという自利追求を行っているように見える、ということは当然に想定し得る。しかしそれは、他者の利への積極性を「義」の根本として考えるならば、なんら「義」を貶める要因にはなり得ない。その共同体の中で、共同体の構成員一人ひとりが、“他者の利”を実現する事を目的として信じている場合、そしてその共同体内で現実的に“他者の利”としての利を実現させている場合、そこに「義」は完成しているのである。共同体外の視点からの位置づけは、そこに見える「義」をいくらかでも否定する機能を有することは無く、他者の利そのものに対して積極的に関与出来るということ、そのこと自体が一つの美德として尊重されるに値するのである。

TOPICS

現代の日本社会には、人間の基本的性質としての欲望を、あらゆる行為の最終的な回答として用いることに信頼を置く傾向がある。あらゆる行為の動機を個人の中で整理出来、かつ最も根本で疑いようのない“欲望”というものに集約してしまうと、それが最終的な答えであると納得する者の割合は大きいであろう。

それは安定した世界に身を置いている故なのだろうか。自己の生活が生存そのものに関して危機的状況に陥る可能性をさして感知しないで住む世界。他者からの助けとしての利を受け取らなければ生存出来ないという者は少なく、状況に迫られての「義」の共同体構築は必要が無いのが現実であるだろう。生存という基本事項をクリアした上で、余財としての利を個人的に追求する事が中心となっている中、人間の本性に対しての悲観主義が、俗世間の部分で一種の流行になっているようにも思われる。それは、利の個人的追求が蔓延する中から生まれるべくして生まれたものである

のか、あるいは“公”的社会において一方的に教育される人間の本性についての過度の美化に対する反抗の一端であるのか、その原因はおそらくは複雑であって、ここに回答として示すことは不可能であるが。

しかし、かつて「義」という他者の利益に対して積極的に関与するその精神が、人間社会の中にあるべき、望まれるべきものとして信じられており、その精神に則る行動が、実際に社会に影響を及ぼした歴史があった。このことは、人間の本性に対する不信感を持つことソレ自体に魅力を見出している者、その不信感を克服するのではなく、維持し続けることをよしとする者、それらに対して、一つの衝撃足り得るのではないだろうか。そして逆に、「義」的な行為を実際に行っている者は、蔓延する悲観主義に臆する必要はないと、そう言って貫えているように感じ取ってもよいのではないだろうか。



第12回異文化交流講演会「義」の中国史 講演風景

TOPICS

受賞紹介

日本英語学会新人賞佳作 受賞

日本英語学会新人賞佳作に選ばれて

■ 島 越郎 助教授 人文学部 言語文化学科

このたび、日本英語学会新人賞に投稿していた論文が佳作に選定され、平成17年11月12日に九州大学で開催された第23回日本英語学会の総会で表彰されました。この賞は、日本英語学会が、若手研究者の育成と研究活動の促進を目的とし、学会20周年を記念して2003年に設定した賞であり、今年度が3回目になります。過去2回において新人賞と佳作に選ばれた研究は無く、今年度初めて私の論文が佳作研究に選ばれました。（尚、新人賞は未だに出ておりません。）

論文名は Reducing Pseudogapping to VP ellipsisで、英語の省略構文に関する研究です。英語には色々な省略現象がありますが、今回取り組んだ現象は次のようなものです。

(1) John will select me, and Mary will too.

(2) John will select me, and Mary will you.

(1)ではMary willの後で動詞とその目的語 select me が省略されているのに対し、(2)では動詞 select のみが省略されています。論文では、この二つの省略構文の類似点と相違点を様々な角度から考察し、それらを体系的に説明することを試みました。未解決な問題も幾つか残りましたが、この試みが評価されたことを嬉しく思っております。

今回の論文は、過去3年間にわたり私が人文学部で開講した英語学特殊講義が土台になっています。思いついた半熟のアイデアを授業

で紹介するたびに、「先生の言うちよること、ようわからん。もっと分かりやすく説明して」という厳しいお叱りを学生諸君からもらい、自分の考えを練り直さなければならないことが何回もありました。当時は腹立たしく思いましたが、今となってはとても貴重なトレーニングをさせてもらったことに大変感謝しております。

私は東北大学の出身ですが、東北大学金属材料研究所の所長をつとめられた本多光太郎先生の言葉に「今を大切に」という言葉があります。恐らく本多先生が教え子に贈った言葉ではないかと推測されます。私はこの言葉を学生時代に知りましたが、年齢を重ねるごとにこの言葉の重みを強く感じるようになってきました。大学が法人化され、研究を取り巻く環境が時間と研究費の両面で厳しくなりましたが、こういう時だからこそ、地に足をしっかりつけ、自分の出来ることを一つずつ確実にやっていこうと考えております。

学内連絡先

TEL&FAX:083-933-5282

E-mail:eshima@yamaguchi-u.ac.jp

T O P I C S

受賞紹介

国際通貨研究所(IIMA)設立10周年記念懸賞論文
「アジア地域の経済協力促進のために何をすべきか」1位入賞

アジア地域主義に対する分析

■ Aysun Uyar アイスン・ウヤル 大学院東アジア研究科博士課程1年

大学院東アジア研究科（GSEAS）博士課程1年のアイスン・ウヤルと申します。日本へ来る前母国のトルコで国際関係論と国際政治経済について研究し「日本と中国のASEAN（東南アジア諸国連合）におけるそれぞれの経済影響」というテーマで修士号を取得しました。トルコで大学の研究助手として3年間働き、2004年4月から山口大学で一年間研究生として、2005年4月から大学院東アジア研究科博士課程に入りました。

現在の研究テーマは東アジアにおける日本とASEANの経済関係：自由貿易協定（FTA）の政治的な分析です。このテーマには三つの部分があります。日本と東アジアにおけるFTAの分析、日本のFTAに対する政官財の意思決定メカニズム、FTAの影響で日本と東アジアの政治経済関係に対する理論的な分析です。

この度、国際通貨研究所（IIMA）の設立10周年記念懸賞論文「アジア地域の経済協力促進のために何をすべきか」で1位に入賞しました。授賞式とアジア地域主義についてIIMAの会議は2004年12月16日に東京で行われました。アジアそれぞれの国々の外交官と官僚者が参加した会議で論文について発表しました。その論文では「非対称機能的な地域主義 - Asymmetric Functional Regionalism - AFR」という地域主義モデルを提唱しました。

論文の第一章では地域主義に対するプラリズムとトランスナショナリズムに集中して理論的に検討しています。第二章ではアジアにおける地域主義の歴史と近代の地域協力を分析します。第三章では地域協定の機能的な比較によって地域的な定義かアジアのアイデンティティかは必要ではないと議論して、アジア全地域にあるそれぞれの政府と経済、社会を結合する非対称機能的な地域主義を提唱します。現在ある地域協力の中ではAFRに一番近いモデルは例えばアジア太平洋経済協力会議（APEC）と東アジア諸国連合+日中韓（ASEAN+3）です。

つまり、AFRは経済協力に集中してその枠組みを促進する安全と政治的な社会的な機能的な相互作用と政府と政府ではないアクターの非対称な相互作用を証明するモデルです。



授賞式の様子

私の授業

現代美術との出会い



中野 良寿 助教授
教育学部 美術教育教室

自己紹介にかえて

私は山口大学で絵画の実技指導に関わる教育者としての顔と、専門研究として現代美術の作品制作・発表などを行う作家としての両方の顔があります。授業は専門教育の「平面造形基礎」「絵画I-V」「絵画特別研究」「卒業研究」「ゼミナール」など、共通教育では「芸術実践(絵画)」「実践的現代芸術論」「やまぐち学」などを担当しています。私が大学時代に専攻した分野は油絵、フレスコ、モザイク、ステンドグラスなど、古典技法を使った壁画研究と現代美術の分野です。技法的には油彩から始まり、西洋美術史の時間軸を遡るように様々な素材を扱っていましたが、今は大きく揺り戻しがあり、現代美術の領域で作品を制作・発表しています。

『現代美術』というあまりなじみのない方も多いと思いますが、改めて定義しようとすると、意外に定義しにくい美術の呼び方であることに気づきます。まずいつからかという問題があります。近・現代美術といえば19世紀後半から現在までの作品といえますが、現代美術というと研究者によって意見の分かれる所です。第二次世界大戦後の芸術動向をまるごと現代美術と呼ぶ人もいますが、ちょっと大雑把すぎる気がします。あるいは1917年のマルセル・デュシャンの「泉」にまで遡るとい人もいますが、それはあくまでルーツとしての作品で、一般的には1960年代後期から1970年代のコンセプチュアル、ミニマル、ランド・アートあたりから現代美術と呼ばれていると思います。広い意味では現代つくられている作品はすべて現代美術ではないかという方もいますが、私が現代美術とあえて呼びたい作品は現代に生きる一個人と現代という時代との関係

が、実感をともなって直接的に感じることでできる表現をもった作品です。

教室を抜け出して

さて、専門教育における授業では、基礎的な絵を描く技術や知識の取得が終わると、できるだけ同時代性をもった作品の鑑賞や実践的制作を奨励しています。「絵画IV」のあたりから応用的な課題になるのですが、本年度は“映像表現と絵画”をテーマにした課題で授業中に制作した作品を、美術教育教室の廊下周辺に設置して発表しました。この映画やビデオなどのワンシーンを様々な素材を使って表現した作品は、写実による再現的な作品とはまた違った非常にユニークな作品が多く見受けられました。また私の主宰するゼミは「レイジー・スーザン'05」(注1)と銘打って行なっています。このゼミは移動式円卓台をつかった円卓会議形式が基本です。円卓台は移動式なので屋外の様々な場所に出かけてゲリラ的にゼミを行うというスタイルを3年以上続けています。

私の作品制作・発表

このような授業形態は私自身の作品制作・発表のスタイルが大きく影響していると思います。そこで私の近年のスタイルを紹介すると、個人名義による発表とコラボレーション(注2)による発表との両方があります。作品はワークイン・プロGRESSという継続的に変化する作品をはじめ、その場所、その時間でしか味わえない儚さをともなうインスタレーションや、身体表現と連動したノイズ・ミュージックといったような、モノとコトのダイナミックな変化そのものを表現のなかに取り入れている作品群です。これらの作品を発表した最近の主な展覧会は「釜山ビエンナーレ2004/釜山市立美術館(韓国)」「Sticks - under the window -/旧百三十銀行ギャラリー(北九州)」「小枝をもった少年/TAPサテライト・ギャラリー(茨城)」「BankARTLife/BankART(横浜)」などの最近の現代美術で注目される展覧会に参加しています。特に「釜山ビエンナーレ2004」(注3)では会場に美術教育教室の学生も少なからず観に来てくれました。彼らにとっては初めての大きな国際展を目の当たりにする良い機会、今までの美術的概念を激しく揺さぶられたことと思います。

現在進行形のアートと出会う機会を

私は学生には現代の美術の動きを学生のうちに感じ取って欲しいと思っています。昨年は「教育学部やまぐち学研究会」主催で「蔚山×山口日韓交流現代美術展」という韓国の蔚山大学との現代美術の交流展を行いました。学生にとって山口という場所は人口も多い訳ではありませんし、他の都市と比べてみてもこじんまりとしていて、ともすると新しい文化について閉鎖的になりかねません。だからこそ積極的に外に目をむけて、その上で山口の面白さを発見して欲しいのです。そういう目で山口を見てみると意

外に現代美術やアートと呼ばれる作品に出会う機会が用意されていることに驚くかも知れません。私はそのような出会いを期待しています。

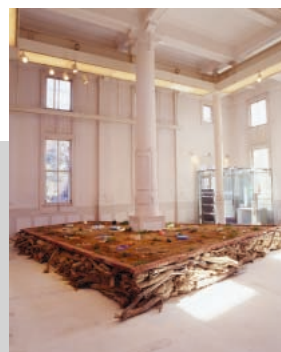
(注1) N-mark 著「ミーティングキャラバン(BankART1929発行)」のp86にその様子が記されています。

(注2) ノーヴァ・リユーストラというアート・ユニット。平成16年度まで教育学部文芸・芸能コースに在籍していた音楽学の安原雅之助教授と2002年に結成。現在も精力的に活動しています。

(注3) ビエンナーレとは二年に一度という意味。世界中のアーティスト40人以上が参加した国際展。日本からは3組が参加しました。



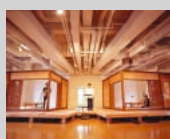
1.



2.



3.



4.



5.



6.

- 1) 小枝をもった少年/TAPサテライト・ギャラリー（茨城）
- 2) Sticks - under the window -/旧百三十銀行ギャラリー（北九州）
- 3) 釜山ビエンナーレ2004/釜山市立美術館（韓国）
- 4) ノイズ・ライブ“NETORI”/BanKART（横浜）
- 5) レイジー・スーザン '05
- 6) BankARTLife/BankART（横浜）

連絡先

TEL: 083-933-5366

E-mail: nakano-y@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

海から近世社会を考える

木部 和昭 助教授
経済学部 経済社会講座

海と河の道

私は経済学部で日本経済史を担当していますが、本来の専門は日本史、特に江戸時代（近世）の経済の歴史が専門です。その経済の歴史の中でも、私が特に専門とするのが近世海運史です。現代のように、鉄道や自動車が発達した状況では想像もつかないかも知れませんが、江戸時代の経済を支えていたのは船であり、海運が最も身近で重要な交通運輸手段でした。学生の時、古文書調査に訪れた筑波山麓の村々は、江戸時代、河川舟運を通じて霞ヶ浦や利根川に連絡することで遠く江戸にまでつながっていました。また、その河の道は、利根川河口の銚子で海運（東廻り航路）と連絡し、東北・蝦夷地（北海道）ともつながっていたのです。今では単なる山間地域に過ぎない村々が、河や海の道を通して驚くほど広域的につながっている、その壮大な物流・流通の在り方に感動したことが、近世海運史の研究に取り組む出発点でした。

西日本経済の中核だった下関

私の主たる研究対象地域は山口県地域です。ご承知のように、山口県（旧長門・周防両国）は、北の日本海、西の響灘、南の瀬戸内海に三方を囲まれた半島状地域です。このように異なる海域を擁し、長い海岸線を持つ地域は、実に魅力的な研究対象でした。日本海は山陰・北陸・東北・北海道に連なる物流の大動脈である西廻り航路の舞台です。瀬戸内海は当時の日本経済の中核であった大坂（江戸時代の表記）へ至る、最も海運業の盛んな地域でした。また、響灘も九州や東シナ海を経て朝鮮や中国といった異国へとつながる重要な海域です。そして、この三海域を連絡する要港として、下関が存在していました。私の研究は、ま

ずこの海上交通の要衝である下関を調べることからスタートしました。

現在ではその重要度は低下していますが、近世期の下関は、西日本において最も繁栄した中継交易港でした。何しろこの港は、日本海航路、九州航路、瀬戸内海航路が交差する海の十字路だったので、諸国の廻船がめまぐるしく出入港し、その繁華は「西の大坂」と称される程でした。しかも、幕末期には、天下の台所・大坂の経済を脅かすほどの勢いがあり、故に、維新の際、長州を巡る主要な事件の多くも、この下関を舞台に展開することになったのです。

残念ながら、下関は第二次世界大戦の戦災の関係で多くの史料が焼失しており、そのことが研究の進展の障害になっています。しかし、下関と取引関係にあった各地の海運経営史料を手がかりに、何とか往時の下関の実態を解明していきたいと思っています。

生活の舞台としての海

この他、私は萩藩の海運史研究にも取り組んでいます。江戸時代というのは、領主層の動向が民衆の経済活動に多大な影響力を持っており、藩の立場、民衆の立場の双方向から総体的に研究を進める必要があります。萩藩海運史の研究では、まず藩による海運政策、廻船調達体制等の解明を進め、その枠組みの下で、実際の廻船経営の実態を分析するという手法をとっています。江戸時代の後半（19世紀）にもなると、長門・周防沿岸部では大小無数の廻船が出現し、藩の手を離れて広域的な交易活動を展開するようになります。当時の萩藩領の廻船はたかだか数十トンの小船ですが、それで日本海の波濤を乗り越えて東北や蝦夷地にまで赴き、盛んな交易活動を行う民衆の姿から、そのたくましさを実感させられます。

一般に江戸時代の民衆は、土地に縛り付けられ、重い年貢を搾取されていたというイメージがありますが、海運史を見る限り、まったくそうした面影はありません。この点については、最近研究に着手した漁業史に関しても同様のことがいえます。長門国豊浦郡（現・下関市）の漁民たちは、動力船のない時代にもかかわらず、毎年のように対馬や五島列島方面にまで出漁していました。そして、

対馬へ出漁した漁民達の中には、密かに朝鮮沿岸にまで出かけて漁を行う者もいたようです。彼らの活動は、その後の遠洋漁業の源流と考えられます。彼らもまた海運業者と同様に、海を舞台として広域的な活動を展開する人々でした。

このように、江戸時代の海の世界は、決して閉鎖的・停滞的なものではなく、庶民の様々な経済活動における生活の舞台でした。近世期の経済社会を海との関わりから考察していく私の研究は、今後、地域や事象を広げながら、さらなる展開をめざしたいと思います。

今後の目標

以上のように、海に視点を据えた研究だけで、次々と対象が広がっていますが、この他にも将来的に取り組んでみたいテーマも少なくありません。特に山口県史や山口市史など、自治体史の編纂に関わる過程で多くの史料を目にすることになり、農村の在り方にも強い興味を抱くようになりました。山口大学図書館所蔵の林家文書、本間家文書など

を積極的に活用しながら、本格的な研究に取り組めばと考えています。

また、経済学部での授業では、日本における資本主義の成立と展開過程（主に明治・大正・昭和戦前期）を中心に扱っていますが、この関係から、近代史の分野にも強い興味があります。山口県を対象とした歴史研究は、明治維新までは旺盛ですが、近代以降となると非常に手薄です。山口大学の経済学部で籍を置く以上、いずれは近世から近代を見通した山口県の地域経済史をまとめたいというのが大きな目標です。そのためにはさらに膨大な史料の山に立ち向かわねばなりません。

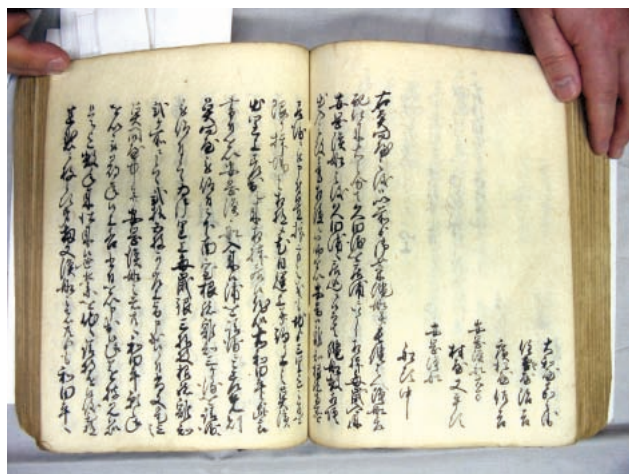
学内連絡先

TEL:083-933-5566

E-mail:kibe@yamaguchi-u.ac.jp



（写真）豊北町（現下関市）
歴史民俗資料館での調査の様子



（写真）対馬藩「郡奉行所毎日記」（宝暦4年）の一部。
安岡（現下関市）の漁船による対馬出漁について記されている。
江戸時代の史料はコピーできないので、すべてカメラ撮影で調査・
収集を行う。

私の研究

救命救急医学における私の研究



前川 剛志 教授
医学部 生体侵襲医学（救急医学）講座

私は1972年から山口大学医学部、医学部附属病院の研究者として患者さんの診療に役立つ研究を行ってきました。最近、サイエンスの目を通して観れば「人間の身体はなんと精密で無駄なく作られているのだろう」、「死んでいく組織や細胞までプログラムに添って制御されている」ことが分かり、畏怖の念さえ懐かされます。80年余の寿命まで部品を入れ換えずに使える機械があるのでしょうか。

さて、私の臨床現場は高度救命救急センターですので、癌以外の病気はなんでもあります。個人的には脳の循環・代謝・蘇生を中心に研究を続けています。脳は1,200～1,500gですが、安静時には身体全体の15～17%の血液が流れ、約20%の酸素と25%のブドウ糖を消費しています。この脳に対する薬物の効果を実験動物（イヌやラット）で検討しました。私は何種類かの静脈麻酔薬や鎮静薬は脳血流量と脳酸素消費量、脳ブドウ糖消費量を減らし、吸入麻酔薬は脳ブドウ糖消費量を減らし、脳血流量を増やすことを明らかにしました。また、静脈麻酔薬、吸入麻酔薬、鎮静薬は脳のエネルギー状態を保っているということも証明しました。

その後、脳保護・蘇生のメカニズムを解明するための研究を進めています。例えば心臓が止まると脳に血液が流れず、酸素やエネルギー源のブドウ糖も枯渇し、5分以上経過すると意識障害など何らかの神経学的障害を残します。そこでこのメカニズムを解明するために、動物（ラット）モデルやヒトの血液・脳脊髄液でCa²⁺、Mg²⁺、グルタミ

ン酸、アスパラギン酸、カテコールアミン、各種サイトカイン（IL-2, IL-4, IL-6, IL-8, IL-10, TNF α , IFN γ ）、フリーラジカル関連物質（NO₂⁻, NO₃⁻, Oラジカル、8OH-dグアノシン、ビタミンC、ビタミンE・・・）、内因性マリファナ（アナンダマイド、2アシルグリセロール）、HMGB1（high mobility group box 1）を測定してきました。そして心肺停止では脳内でグルタミン酸、アスパラギン酸、NO₂⁻、NO₃⁻、IL-6、IL-8などが上昇していて、心肺蘇生後の患者さんの意識障害に関連することが分かりました。

このように神経細胞死のメカニズムが少しずつ解明されていますが、その治療法はほとんどありませんでした。そこで当教室ではその方法として1990年当初より、軽度低体温療法を確立し、臨床応用をしています。現在までに27人の心肺停止蘇生後患者さんに応用し、8人が社会復帰（自分で生活できるレベル）しました。このうちの最長心停止時間は12分間（一般人の1次救命処置あり）でした。また、本院の脳神経外科（鈴木倫保教授、藤澤博亮講師）と共同で急性重症頭部外傷患者さん40人にも軽度低体温療法を応用し、年齢が50歳以下であれば、78%、全体では50%の患者さんが社会復帰しています（図1）。現在、山口大学が主体となり、全国40施設で臨床研究が為されています。なお、この臨床研究は米国のNIH（National Institute of Health）とFDA（Food and Drug Administration）が承認したシステムに登録され、世界から注目されています。

昨年5月に神経細胞死、脳保護・蘇生のメカニズムを解明する方法としてプロテオーム解析システムを企業との共同研究で導入しました。図2にその概要を示します。最近、ヒトの遺伝子が全て解明されました。その遺伝子が作る蛋白質を網羅的に測定するプロテオーム解析を行っていますが、このプロジェクトで山口大学研究特認教授を拝命しました。身体を構築する蛋白質を微量試料（100mg以下）で100～500種類測定、解析して病気の原因を追及するもので、世界的に注目されている分野です。このシステムを利用し、医学部以外の先生方とも蛋白質の網羅的測定を行い、研究を続けていく予定です。

図1. 重症頭部外傷患者に対する軽度低体温療法の効果

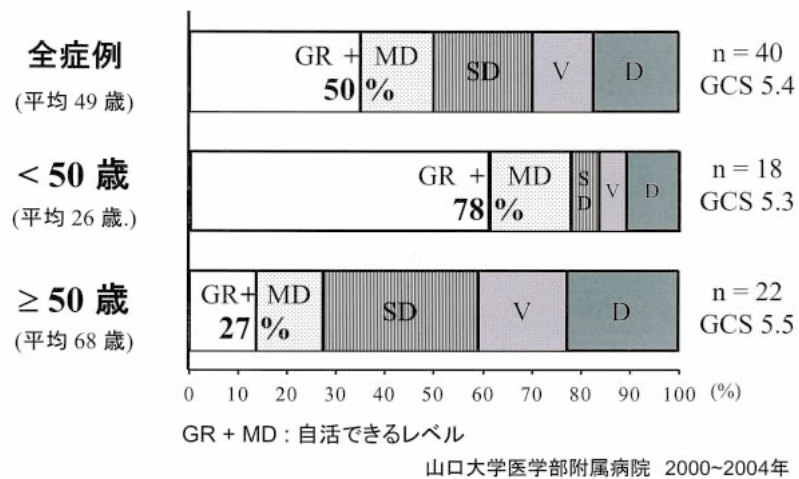
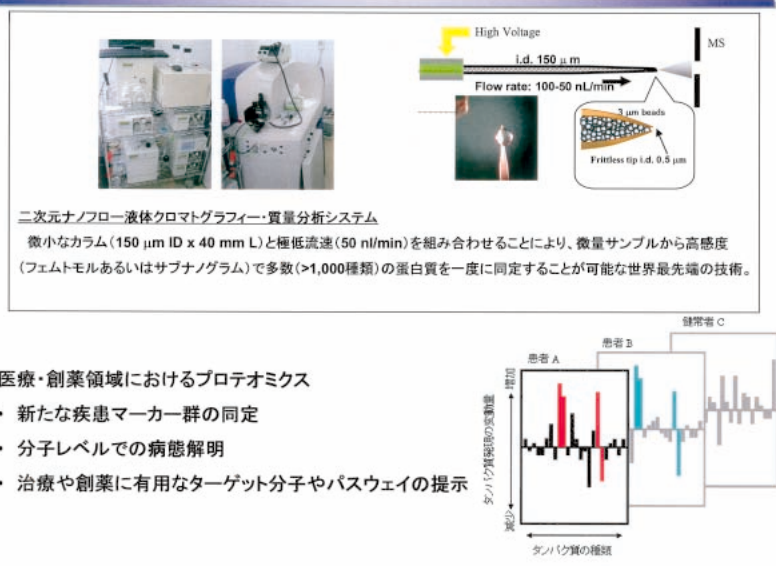


図2. 医療・創薬領域へのプロテオミクス技術の応用



学内連絡先
TEL:0836-22-2343
E-mail:tmaekawa@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

『近代日本の政軍関係と平和問題を読み解く作業を通して』



近代日本政治史の主要なテーマである政治と軍事の関係、具体的には政党と軍部の相互規定関係についての研究が、近年政軍関係(Civil-Military Relations)論として注目を集めている。早くからこの領域に関心を抱き続けてきた著者は、この数十年間にわたって発表してきた論考からなる『近代日本政軍関係の研究』(岩波書店、2005年3月刊)を刊行した。政軍関係への関心は、さらに戦後にも進み、その結果戦後日本の文民統制をテーマとする『文民統制 自衛隊はどこに行くのか』(岩波書店、2005年6月刊)を出版した。これは『図書新聞』や『朝日新聞』などいくつかの場で書評され議論の対象となっている。政党と軍部の関係だけでなく、政党と軍部を対象にした以上、官僚の問題に触れざるを得ない。そこで、『岩波講座 アジア太平洋戦争.2 戦争の政治学』(岩波書店、2005年12月刊)で『戦時官僚論』を書いた。こうして昨年は、軍部・政党・官僚と、近代日本から現代にまで通底する日本の政治組織の実体に迫る作業に取り組んだ一年であった。その他に、講義用にと『戦争と平和の政治学』(北樹出版、2005年9月刊)も出版したが、こちらは極めて楽しく書き上げた。



縷縷 厚 教授 人文学部社会情報学講座

TEL:083-933-5278 E-Mail:koketsu@yamaguchi-u.ac.jp

『ブッカー・リーダー ―現代英国・英連邦小説を読む―』



(開文社出版、2005年5月刊行)

吉田徹夫(監修)、福岡現代英国小説談話会(編)、宮原一成・池園宏他(共著)

題名にある「ブッカー」というのは、現代英語小説を対象とする各種文学賞のうち最大級のものである「ブッカー賞」を指しています。1969年に創設されたこのブッカー賞は、イギリス連合王国とアイルランドそしてイギリス連邦で出版された英語小説の中から、その年ごとの頂点となる最優秀作を選出するものです。35年を超えた歴史の中で、数々の珠玉の作品がこの賞を受けてきました。本書は、そのブッカー受賞作家たちの作品から厳選した15作について考察した本格論文集です。またそれと同時に、受賞作品のすべてについて詳しい作品あらすじを載せて紹介する読書ガイドでもあります。

もちろん、この一冊で現代英国・英連邦の小説の傑作すべてが俯瞰できる、とは申しません。賞の選考にはいろいろな思惑が絡むことも多かったようですし、「なぜあの作品が選に漏れたのか」と首をかしげたくなる選考結果も決して少なくないのですから。それでも、ブッカー受賞作品や最終候補に残った小説群が、英語圏のかなりの部分をカバーする地域から生み出された粒選りの本であることは疑う余地がありません。そうした各作品が織りなす豊かな文学の海に、読書愛好家の皆さんが乗り出すための水先案内代わりになれば、という思いで編まれた本です。曲がりなりにもブッカー受賞全作品を網羅した点で、今のところ他には類を見ない本だと自負しております。

なお、本学教員の池園はP・フィッツジェラルドとK・イングロを論じる2本の論文を執筆、宮原はA・ブルックナー、P・ライヴリー、P・ケアリー、P・バーカーを扱う論文4本とまえがきの執筆、そして受賞作品あらすじ紹介の作成と編集全般に携わりました。他の論文も読み応えのある力作揃い、あらすじ紹介もわかりやすさに心を砕きました。ぜひご一読を。(文責:宮原)

宮原一成 助教授 人文学部言語文化学科

(写真上:平成18年4月教授昇任予定)

TEL: 083-933-5281 e-mail: miyahara@yamaguchi-u.ac.jp

池園宏 助教授 人文学部言語文化学科(写真下)

TEL: 083-933-5264 e-mail: ikezono@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

『21世紀後半の世界の言語はどうなるのか—情報化・国際化のなかの言語』

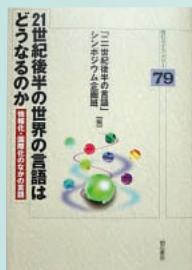
(明石書店 2005年9月)

本書は山口大学において開催された公開シンポジウム「21世紀後半の言語」に関する報告書です。廣中平祐前学長の発案により、山口大学人文学部で「21世紀後半を読むプロジェクト」が行われましたが、これはその中の一つの研究成果です。

一般にはあまり意識されることはありませんが、現在地球上では6000を超える言語が話されています。しかし21世紀のおわりには、その9割が地球上から消滅すると予測する学者さえいます。20世紀はまさに、人類がかつて経験したことのないペースで急速に人口が増加し、少数の大言語が巨大化し、大多数の少数者言語を周辺に追いやられ、ついには消滅させようとしているのです。

言語はよく生物種と比較されることがあります。環境破壊が進むことで生態系が破壊され、多くの生物種が減っていることはメディアで取り上げられることもあり、多くの人の関心を呼んでいます。一方言語に関しては、現在ではジェノサイド(大量殺戮)による言語集団そのものの絶滅というのがほとんど聞かなくなりましたので、言語の話手がいなくなるということはそのままその話手が死に絶えるということの意味しません。それは言語の伝承がなくなり、子供の世代が別の言語を母語として取り替えていくことを意味します。

言語はその話手をなくしたときに滅びるものです。見た目世界の人口が増えている中、言語が消滅するというのは一般には意識しにくいことですが、確実に現在進行しております。人類の英知である言語の多くがここ100年ぐらいの間に永遠にこの地球上から消滅する恐れがあります。本書はそのことをテーマに一般の人にもわかりやすく説明したシンポジウムの記録です。



「21世紀後半の言語」シンポジウム企画班代表

乾 秀行 助教授 人文学部言語情報学講座

TEL:083-933-5270 E-mail:inui@yamaguchi-u.ac.jp

『『おくのほそ道』の本文研究—古典教育の視座から—』(全国学校図書館協議会選定図書)

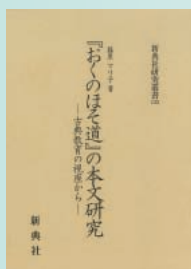
(新典社 2001年5月刊行)

本書は、『おくのほそ道』の本文に仮名遣いの規範が存在することを報告し、その調査結果をもとに諸本の特徴や関係について考察した第Ⅰ部と、明治以降の国家施策のもとで教科書を通じて『おくのほそ道』がわが国の代表的古典の地位を確立していった経緯を分析・考察した第Ⅱ部とからなっています。

戦前の中学校・戦後の高等学校の教科書を調べていきますと、『おくのほそ道』の古典化に教科書が大きな役割を果たしたことが分かります。同時に、教科書の『おくのほそ道』の本文が、戦前の教科書ではしばしば改変されていることにも気づきます。それは、学校文法に合わせた表現の変更であったり、『おくのほそ道』の本文に突如として芭蕉の他の作品を紛れ込ませるズサンな編集であったりします。こうした気ままな本文の扱いは、戦後の教科書からはさすがに姿を消すのですが、今日なお、本文の改変が通例となっている箇所があるのをご存じですか？

教科書では、古典の仮名遣いは現在に至るまで歴史的仮名遣い(契沖仮名遣い)に変更されています。ことに、江戸期は仮名遣いの混乱期と考えられていましたので、『おくのほそ道』も、明治以来、規範とされた歴史的仮名遣いに合うように変更されてきました。しかし、『おくのほそ道』の信頼できる古写本を見ますと、仮名遣いは何度も訂正されていて、何らかの規範があったことを窺わせます。そこで、『おくのほそ道』の仮名遣いの実態調査を実施しましたところ、『おくのほそ道』には歴史的仮名遣いとは別の、和歌や連歌の書で重んじられてきた伝統的な仮名遣いが用いられていることが判明しました。芭蕉の教養の深さが浮かび上がりました。

本書ではこの結果を活用して、古典本文のありかたや、蕉門の伝書の信憑性、『おくのほそ道』の諸本の系統化や底本の問題等について検討を試みています。いずれも教科書調査から出発したテーマを取り上げています。



藤原マリ子 助教授 教育学部教科教育コース

TEL:083-933-5312

E-mail:mf260923@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

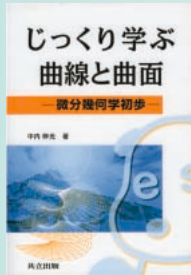
「じっくり学ぶ曲線と曲面… 微分幾何学初歩」

(共立出版、2005年9月刊行)

学生:「…であり、以上から○○○という結論が導かれます。」

先生:「じゃあ、それを絵に描いてみて。」

学生:「絵、絵ですか…?」



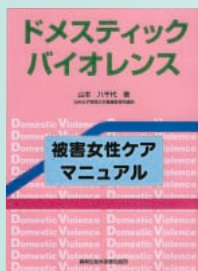
数学では論理的な思考力が要求されます。学生時代に、「証明」のような、筋道を立てた議論に悩まされた経験をお持ちの方が多くはないでしょうか?このような論理を重んじる数学の中にあつて、論理的思考と対極にある「ビジュアルな思考」や「直感」が重要となる「幾何学」という分野があります。「幾何学」は図形をあつかう学問であり、特に、微分法を用いた幾何学は「微分幾何学」と呼ばれます。本書は、対象を曲線と曲面にしばって、微分幾何学の初歩を解説したテキストです。

3年ほど前に書いた論理の入門書には、「自分で描いたイラスト」と「おやじギャグ」を入れたのですが、今回はさらにバージョン・アップしています。「イラストとギャグがなければ、ページ数が減って、もっと値段が安くなるのに…。」という、しごくごもつともな御意見もありましたが、私のスタイルで通しました。その心が伝わったのか、できあがった裏表紙には、本文中に描いたイラストが入っていました。したがって、一見すると、「えっ?大学の教科書?」という体裁になっています。でも、内容はちゃんとしたテキストですよ。

中内伸光 助教授 理学部数理科学科
TEL: 083-933-5661 (Fax 兼用)
E-mail: nakauchi@yamaguchi-u.ac.jp

『ドメスティック・バイオレンス、被害を受ける女性と子どもにエンパワメントを』

(ドメスティック・バイオレンス 被害女性ケアマニュアル、興交易医書出版部)



夫や恋人など、親密な関係にある男性からの暴力、ドメスティック・バイオレンス(以下DVと記)問題が近年クローズアップされるようになりました。夫や恋人から暴力を受ける人たちはどうして別れないのでしょうか。いろいろな理由があります。

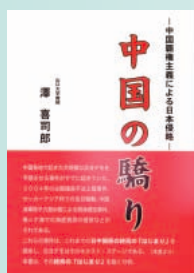
一番大きな理由は女性の自立を阻む社会制度でしょう。また暴力を振るう男性は女性を執拗に追いかけます。逃げることで命の危険が押し寄せるので、逃げられない女性と子どもが多いのです。この他に、暴力を受ける女性の無力化ということもあります。「おまえはバカだ、役立たず」と罵られながら、殴る、蹴るの暴力を受ける生活を毎日送ると、女性は力を失っていきます。「何をしても無駄だ」、「逃げられない」、「生活できない」と思うようになり、行動を起こす力を失っていきます。

DV問題の一番大きな問題は被害者が一人で問題を背負い込むことです。本書は、力を失い「誰も助けてくれない」と一人で苦しむ女性に対し、援助を行う人のために書いたマニュアルです。暴力を受ける女性は身体的にも精神的にも健康を害しますので、この詳細を書きました。またDV問題は複雑で理解しにくいので、援助提供者は問題をどう理解したらいいのか、このことについて詳しく説明しています。本書は医療従事者に向けて書いたものですが、今後出会う人も含め、知人がDV問題で苦しんでいる人、問題に遭遇したことはないけれど、将来子ども心の援助を行う仕事に就く人にも十分役立つものです。大勢の人が問題を理解し、学習し成長することが、日本全体のDV問題と児童虐待問題の解決につながります。

山本八千代 助教授 医学部保健学科
TEL: 0836-22-2829
E-mail: yachiyo@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

『中国の驕りー中国覇権主義による日本侵略ー』



米国防総省は「アジア太平洋地域は、ユーラシア大陸の中東から北東アジアにかけて広がる《不安定の弧》の一部として、軍事的紛争の起こりやすい地域である」としています。この「不安定の弧」は中東の原油に大きく依存している日本のシーレーンと重なるため、そこでの軍事的紛争の勃発は日本に致命的な影響を及ぼすものと予想されています。

「不安定の弧」に位置する国々の中で、日米両政府が最大の潜在的脅威として注視しているのが中国で、その中国の潜在的脅威が顕在化したのが2004年でした。それは、1月の小泉首相の靖国神社参拝に対する内政干渉、3月の中国人活動家による魚釣島への不法上陸、5月の東シナ海での国際法に違反する天然ガス採掘施設の建設、7月のサッカーアジア杯での反日暴動、9月の日本の安保理常任理事国入りへの反対表明と嫌がらせ、11月の中国海軍攻撃型原子力潜水艦による日本の領海侵犯などの事件や出来事に顕れ、またそれは2005年4月の中国での大規模な反日デモを予感させるものでした。

これらの事件や出来事が、これまでの日中関係の終焉の「はじまり」を意味する序章とすれば、反日デモは終章に向けたネクスト・ステージと位置づけることができます。しかし、終章を迎えるのはさほど遠い先の話ではなく、日本が東シナ海でガス田の試掘を始めれば、それが終章の幕を開くことになります。というのは、日本政府が民間業者に試掘権を付与する手続きを開始するや、中国政府は「日本政府の行為は中国の権益及び国際ルールに対する重大な挑発だ」と強く非難し、日本が試掘を開始すれば「さらに踏み込んだ対応をする権利を持つ」と、武力行使を辞さない意向を示唆しているからです。このことは、今では多くの識者によって指摘されています。

本書は、これまでの日中関係の終焉の「はじまり」を分析し、日中国交断絶をも視野に入れた日本の選択と進路について論じたものです。

澤 喜司郎 教授 経済学部国際経済学科

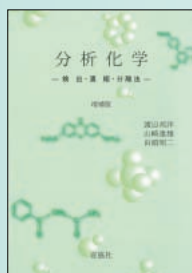
TEL: 083-933-5553

E-mail: sawa@yamaguchi-u.ac.jp

「分析化学 ー検出・濃縮・分離法ー（増補版）」

（渡辺邦洋・山崎重夫・田頭昭二著、宣協社、2005年10月1日発行）

近年の工業の発展による化学製品の種類と量は増加の一途をたどり、それにともなって資源、エネルギー、環境汚染の諸問題も増大しています。生活の快適さを追求した結果としての化学工業の発展が逆にこれらの問題の原因になる構図は化学という学問に期待できないようにも見えます。しかし、産業の発展によって引き起こされる諸問題を解決できるのもまた化学を中心とする学問であり技術であります。なかでも分析化学は新規物質を生み出す研究開発の推進力となる学問であり、化学技術の基礎です。



本書はこれから分析化学を学ぼうとする学生が分析法の基礎と実際を理解して、さらに高度な専門書を紐解くための入門書として執筆しました。ただ分析化学の領域は非常に広く、そのすべてを網羅したわけではありません。また、初版の発行以来5年が経過して、その間に分析化学の進歩があり再版に当たって不足している部分を付録として増補しました。特徴は分析法の重要部分を検出・濃縮・分離ととらえ、その要点を述べるとともに原理を理解するのに必要な平衡論・速度論にふれ、古典的重量分析・容量分析と現代の機器分析についてとりあげました。実際の分析に古典的方法の実用性は減少するかもしれませんが、分析化学の基礎を学ぶ上で、定量的に沈殿をつくり直接その質量を量ることや、共存する妨害成分を除去するために化学的知識に基づき目的物質を分離精製することは極めて重要です。さらに現在使われている多くの分析装置はコンピューターを備え自動化されており、特別な知識なしでも装置の操作法のみを知ることにより分析結果が得られることがありますが、しかし、基礎知識なくしての分析は度々大きな間違いを引き起こします。これらを踏まえ分析化学という学問について更に関心を深めていただきたいと思います。

田頭昭二 教授 理学部化学・地球科学科

TEL.:083-933-5734

E-mail: taga@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

『LIFETIME ENGINEERING OF CIVIL INFRASTRUCTURE』

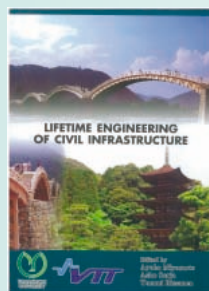


(山口大学メンテナンス工学研究所 2006年2月17日発刊)

日本や欧米などの先進諸国では、社会基盤を支える施設などの社会資本ストックが質・量ともに急速に増大してきているため、社会資本のライフタイムマネジメントが必要となってきました。すなわち、今後増えるであろう社会基盤構造物の維持管理を合理的かつ戦略的に行う枠組みを早急に確立する必要があります。欧米などの先進諸国では早くからこのような問題に直面しており、この分野での技術の蓄積が行われています。我が国が持っている維持管理に関わる技術を世界に発信するとともに、維持管理の先進国である欧米の技術や情報を積極的に取り入れ、より合理的な補修材料や補修・補強工法の開発、合理的な維持管理のための意志決定支援システムなどについて、日欧米の各方面から広く意見を出し合うことによって議論を深めることが重要となります。

本書は、社会基盤構造物の維持管理業務を合理的に行うため、次世代情報処理技術、高度なセンシング技術などを用いて、統合型ライフタイムマネジメントシステムの構築を議論することを目的に、山口大学工学部において開催した標記テーマのWorkshopで発表された論文を、査読を経て収録したものです。その結果、本書は合計19編のKeynote papersとInvited papersから構成されています。収録されている論文は、ライフサイクルコストやマネジメントの概念などを取り入れ、土木工学の枠組みを越えた広範囲な学術領域の有機的な結集のもとに、情報ネットワークによるデータベースシステム、マルチメディアバーチャルリアリティ技術、インテリジェントモニタリング技術などを援用して、社会基盤構造物の計画、設計から、これらが耐用年数を迎えるまでの維持管理に全責任が持てるインフラドクターの創設を目指す意欲的なものとなっています。

このような積極的な取り組みが進展し、社会基盤構造物に対する維持管理業務の世界標準化の時代に向けたイニシアティブを日本が発揮できるようになると、構造物維持管理の効率化につながるのみならず、技術的な魅力も大いに増大するものと考えられます。本書がその一助となることを期待します。



宮本 文穂 教授 工学部知能情報システム工学科(写真上)

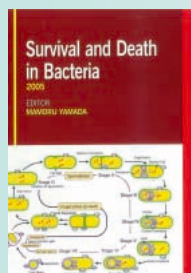
Asko Sarja 教授 VTT Technical Research Centre of Finland(写真中)

Tommi Rissanen 主任研究員 工学部知能情報システム工学科外国人研究者
(写真下:VTT Technical Research Centre of Finlandから派遣)

TEL/FAX:0836-85-9530(宮本研究室)

E-mail: miya818@yamaguchi-u.ac.jp

『Survival and Death in Bacteria』



現在、多くの代表的な微生物において生命情報の解読(ゲノム解読)が完了し、一見、微生物研究はかなり進んでいるように思われています。しかしながら、個々の微生物についてさえも分からない点の方が多く、環境中での微生物の生活様式や生存機構に至ってはほとんど不明です。本書は第25回日本分子生物学会年会(平成14年12月開催)ワークショップ「プログラム死:単細胞生物からの展望」での講演とそれに関連した話題を中心に、それぞれの分野での先端的研究を紹介しています。微生物の「生存と死」がテーマとなっていますが、様々な環境やその変化に微生物がどのように対処(応答)するかその巧妙な仕組みを分子レベルで示しています。また、多細胞生物で不要な細胞や障害を受けた細胞を除去するためにアポトーシスと呼ばれるプログラム細胞死が知られていますが、集団の維持や種の保存のために類似な機構が微生物にも存在していることを紹介しています。英文であることから日本人学生にはやや難しいかもしれませんが、微生物学分野を専攻する学生や院生に一読してほしい本です。

山田 守 教授 農学部生物機能科学科

TEL:083-933-5869

E-mail:m-yamada@yamaguchi-u.ac.jp

平成18年度公開講座のお知らせ

講 座 名	受講対象者	開設期間	時間帯
歩いて、学んで、理解する。カタログにない秋吉台	市民一般(成人対象)	4/22～4/23	10:00～17:00 10:00～15:00
「おくのほそ道」を読む	市民一般	5/20、6/3、17、7/1、15、29	14:00～15:30
健康づくりのための運動指導講座	地域の運動指導者や各種学校において健康教育に携わっている方など	5/27、6/17、7/8、11/11、12/9、1/13	13:00～17:00
小麦栽培から始めるパンづくり	市民一般(成人対象)	5/31、8/23、11/8	10:00～15:00
市民のためのライフプラン講座	市民一般	6/3～7/8	14:00～16:00
病気とつきあいながらいきいきと生きるために 一乳がんの手術とリンパ郭清後の患者さんのためにー	市民一般	6/10	13:00～16:00
電波で見た宇宙	市民一般	6/10～7/8	14:00～16:00
プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり	平成16、17年度の「小麦栽培から始めるパンづくり」修了者	6/28	10:00～16:00
2006年小・中学校教員のための英語・国際理解指導者研修会	小・中学校教員及びテーマに関心のある方	8/2～ 8/4	10:00～16:00
理科実験講座	小・中学校教員	8/7～ 8/8	9:00～16:00
木工入門	市民一般(小学生以上)	8/11～ 8/13	8:30～13:00
農山漁村での安らかな暮らしを願って、柿本人麻呂を祀る	市民一般	9/30～ 10/1	15:00～17:00 10:00～12:00
ヒューマンスクールⅩⅧ「やまぐちの美術史」	市民一般	10/4、18、11/1、15、29、12/13	13:30～15:00
神経系の老化「どのように予防するか、どのように治すか」	市民一般	10/2、16、23、30、11/6、13	19:00～20:30
やまぐちサタデー・カレッジ2006 外国語学習コース(英語) 「英詩のこころ」	市民一般・学生	5/13～7/1	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2006 現代文化コース 「現代社会における不安とリスク“安心・安全な社会をめざして”」	市民一般・学生	5/13、27、6/3、10、17、24、7/1、8	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2006 異文化交流コース 「異文化理解のための第一歩」	市民一般・学生	10/7～11/25	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2006 外国語学習コース(ドイツ語) 「ハイジの世界」	市民一般・学生	10/7～11/25	15:10～16:40

お問い合わせ

山口大学エクステンションセンター

〒753-8511 山口市吉田1677-1

TEL (083) 933-5059 FAX (083) 933-5154

E-mail: kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp

新聞掲載された山大・地域から見た山大

11月

- ◆ 文科省の大学教育支援プログラム
学生発案企画支援など
山大の5件採択 中四国、九州で最多 (山口:3日)
- ◆ **山口大とフジノン** 内視鏡に白色LED
コストも苦痛も軽減 (日経:4日)
- ◆ 医療イン・フォーカス
患者から見た山口大・先端治療
第四部 子宮頸がんにも挑む
① SCC抗原
山大発の腫瘍マーカー
病状管理に極めて有効な指標 (宇部日報:7日)
- ◆ 医療イン・フォーカス
患者見た山口大・先端治療
第四部 子宮頸がんにも挑む
② PDT (光線力学的療法)
妊娠・出産を可能に
ピンポイントでがん細胞攻撃 (宇部日報:8日)
- ◆ 心臓外科の第一人者
須磨教授の講演会も ー12日から医学祭ー (宇部日報:8日)
- ◆ マツダ財団の助成決まる
山大工学部、上村教授と比嘉助教授の研究 (宇部日報:8日)
- ◆ 山大理学部サイエンスワールド
実験、子ども夢中
研究発表 厚狭高生物部が最優秀 (山口:9日)
- ◆ 医療イン・フォーカス
患者見た山口大・先端治療
第四部 子宮頸がんにも挑む
③ NAC (主治療前補助化学療法)
抗がん剤で縮小後に手術
生存率アップ、進行がんにも対応 (宇部日報:9日)
- ◆ 医療イン・フォーカス
患者見た山口大・先端治療
第四部 子宮頸がんにも挑む
④ 子宮頸がんの若年化
HPV感染への理解必要
ここ10年では10代にも出現 (宇部日報:10日)
- ◆ **国際ワークショップ**
社会基盤構造物延命を考える
ー工学部に研究者100人ー (宇部日報:11日)
- ◆ **日中韓3大学が交流**
山口大・山東大 (中国済南市)・公州大 (韓国公州市)
学生ら「日本に来て刺激」
研究室訪れ意見交換 (宇部日報:12日)
- ◆ **事業化へ大きく前進** ー知的クラスター協議会ー
高輝度LED 年内に完成
医療機器 試作品は来年3月末まで
量産態勢の確立、課題 (宇部日報:12日)
- ◆ 授業の成果を発表 ーものづくり創成センターー
15日教育シンポジウム (宇部日報:14日、16日)
- ◆ 国際遠見交流に協力を ー山口大や徳山大の学生らー
あしながPワーク10 寄付を訴え (毎日:14日)
- ◆ 元気県づくり、二井知事熱弁
山口大で政策など紹介
学生200人が耳を傾ける (宇部日報・山口:15日)
- ◆ 第44回山口大吟詠部吟詠発表大会 (朝日:17日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科教授・大田研一氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑤ 技術者にとってお金の話は卑しいこと?
会社の仕組みへの理解が必要

体系的な訓練受け、評価得る

(宇部日報:18日)

- ◆ 中国史講演会
ー人文学部異文化交流研究施設ー (サンデー山口:20日)
- ◆ 山大あす東アジアシンポ
経済学部創立100年・観光政策学科新設記念 (山口・サンデー山口:19日)
- ◆ 「防犯活動地区に支援を」
(会長＝辻正二・山口大学人文学部教授) (読売:19日)
- ◆ 企業と住民、意見交換
環境や安全など相互理解
ー小嶋直哉山口大工学部教授ら六人がパネリストー (宇部日報:22日)
- ◆ 宇部新川LC 目の健康講座
定期検診の重要性強調
西田教授が「緑内障」講演 (宇部日報:22日)
- ◆ バイオセラピー市民公開講座
ー2日、全日空ホテルー
岡正朗医学部消化器・腫瘍外科教授司会
吉野茂文医学部消化器・腫瘍外科講師講演
「信頼できる食品研究のホント」 (宇部日報:24日)
- ◆ 携帯型の地震振動機 ー山大工学部山本哲朗教授ー
中原鉄工所と共同開発
小学生の防災授業などに活用 (宇部日報:25日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科教授・千秋隆雄氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑥ 魅力ある製品開発
先を見た事業戦略をロードマップの整備必要 (宇部日報:25日)
- ◆ バイオマス用いた事業探る
5人の専門家が展望
山大地域共同研究センター 民間の研究者ら熱心に (宇部日報:25日)
- ◆ 文科省の「成果48事例」選出
ー農学部の丸本卓哉教授らのグループー
『荒れ地に緑を』山大微生物工法
雲仙・普賢岳で効果 (朝日:28日)
- ◆ **大動脈瘤** **内科的根治治療に道**
ー山大医学部ー
活性化抑える物質を発見
血管壁分解 阻止し自然治癒 (山口・毎日・読売・朝日・宇部日報:28日)
- ◆ 生活習慣病を考察
10・11日日本予防医学会総会
市民向け公開講座も (宇部日報:29日)
- ◆ 「地震 怖いな～」
児童が液状化実験 宇部の吉部小 (朝日:30日)
- ◆ 発達障害 地域支援を
山大会館で方法探る研修会 (毎日:30日)
- ◆ **学習意欲あるシニア集まれ**
山大で来夏、講義 ーJT&共同ー
「団塊」退職見据え (山口:1日、宇部日報:16日、毎日:1月7日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科教授・河村 栄氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑦ 組織と倫理観
高い人間性持つリーダーに
「組織のため」は欲望の責任転嫁 (宇部日報:2日)

12月

- ◆ **学習意欲あるシニア集まれ**
山大で来夏、講義 ーJT&共同ー
「団塊」退職見据え (山口:1日、宇部日報:16日、毎日:1月7日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科教授・河村 栄氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑦ 組織と倫理観
高い人間性持つリーダーに
「組織のため」は欲望の責任転嫁 (宇部日報:2日)

- ◆ 市内4企業の新事業に助成 ーやまぐち産業振興財団ー
(宇部日報:2日)
- ◆ 市民向けに講座
バイオセラピーに理解深める (宇部日報:5日)
- ◆ 学長候補2氏 教職員に所信 ー山口大一 (朝日:6日)
- ◆ 「子どもたちに大きな夢を」
ー「やまぐち街なか大学」主催ー
前山口大学長 広中平祐さんが講義 (読売:7日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科教授・木村友久氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑧ 知的財産系記事の読み方
情報を基に深い理解を
ネット上にアドバイス満載 (宇部日報:9日)
- ◆ 最新の予防医学を考察
あす 山医医学部で公開講座 学術総会に全国から300人
(朝日・読売・宇部日報:10日)
- ◆ **ちゃぶ台ルーム山大に登場**
優れた先生に育て
学生が疑問・悩み 応える大学教員ら
(朝日:14日、山口:18日)
- ◆ 実験で自然災害学ぶ
ー工学部の山本哲朗教授ー
山陽小野田市有帆小 山口大教授招き授業
(読売:14日)
- ◆ 山大学長に丸本卓哉氏 **「人材育成を重視」**
研究費確保へ戦略プラン
(山口・朝日・読売・毎日・宇部日報:16日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科助教授・
グエン・フー・フック氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑨ データから見る地域経済
機械産業振興を重点的に
地域内調達率高く、宇部圏域に影響
(宇部日報:16日)
- ◆ 山大演劇部冬公演 (サンデー山口:16日)
- ◆ 日本真空協会 工学部で中国研究例会
チタンの現状と課題探る (宇部日報:17日)
- ◆ 県立大理事長江里氏に決定 ー4月に任命ー
(朝日・読売・中国・宇部日報:20日)
- ◆ この人
山口大学長に来年5月就任が決まった丸本 卓哉さん
研究より教育重視少しずつ方向転換を (中国:20日)
- ◆ 大学で学んだ成果を発表
自分なりにー工夫
山大で講義受講 宇部高1年生 (宇部日報:20日)
- ◆ **山大付属病院**患者にプレゼント配る
ークリスマスのタペー
津軽三味線の演奏も (宇部日報:20日)
- ◆ 駅前照らす『癒やしの光』 ー高輝度LEDイルミ点灯ー
世界発 スカイブルーと緑白色
知的クラスター事業の成果「地域活性化に役立てたい」
谷口常正山口大工学部教授 (宇部日報:21日)
- ◆ **四季風**
「山口大学教育学部の教室が『ちゃぶ台ルーム』に生まれ変わった」
(山口:21日)
- ◆ 市民会館で山大マンドリンコンサート
ー第46回定期演奏会を開催ー (サンデー山口:24日)
- ◆ **文部科学省**丸本山口大副学長の普賢岳緑化研究
国内10年間の「成果」に選出 (宇部日報・朝日:28日)
- ◆ **動物病院用の照明器具**野菜・海藻の育成装置
LED活用で新研究
山口大などの知的クラスター創成事業

来年度、医工連携も

(中国:29日)

'06 1月

- ◆ 液状化実験装置を使って小学生たちに防災授業を実施
ー工学部山本 哲朗教授
(月刊PORTAL【ポータル】:1・2月号)
- ◆ 地域の特性生かして ー山口大学長 加藤 紘
(山口:3日)
- ◆ **ひと**
山口大次期学長 丸本 卓哉さん
意見を聞き新しい大学目指す (宇部日報:4日)
- ◆ **募集**
コウモリ観察 ー秋吉台エコ・ミュージアムー
松村 澄子・山口大助教授 (朝日:5日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科 教授・福代和宏氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑩ 「品質」という言葉のとらえ直し
「魅力的」に気を取られず
まず「当たり前品質」に到達する (宇部日報:6日)
- ◆ 新年あいさつ
大学院「分子生命学」新設 山口大学長 加藤 紘
良い医療人の育成と大学院充実を目指す
山口大医学部長 石原 得博 (宇部日報:6日)
- ◆ 21日に川棚で子育て支援講演
講師は山口大教育学部木谷秀勝助教授 (山口:7日)
- ◆ 団塊の世代よ 山口を学ぼう
JTB・山大がサマーカレッジ
講義2週間 経済効果、県も期待
(朝日・毎日:7日、中国:15日)
- ◆ 山大経済学部
次期学部長に藤井氏を選出 (朝日・読売:12日)
- ◆ 山大の徳富さんが参加
世界青年の船 県庁で壮行式 (山口:13日)
- ◆ **研究室から**
世界のオンリーワン目指す
ー山口大工学部 宮本文穂研究室ー
構造物のお医者さん (毎日:13日)
- ◆ 山口大の劇団笛「ブッタ」を上演 (山口:13日)
- ◆ **救命・救急 ボランティア「SRS」初出動**
山陽小野田消防本部の救急救命士、レスキュー隊員、
山口大医学部の医師
専門家だけの組織は県内初
スポーツ事故に機動力発揮 (宇部日報:16日)
- ◆ もちつき楽しいね!
ー国際交流ひらかわの風の会
(代表・中村幸士郎山口大教授)ー
地域住民と山大留学生 ふれあい交流会
(山口:17日)
- ◆ 「役立つ生き方したい」医師の道に
震災体験きっかけ 山大3年河野香南子さん
(朝日:17日)
- ◆ 山大農学部長に古賀教授を再選 (山口・読売:19日)
- ◆ 山大工学部長に三浦教授
(山口・読売・宇部日報:20日、毎日24日)
- ◆ リスニング中の飛行 ーセンター試験ー
山大が自粛申し入れ 米軍岩国基地に
(中国:19日、朝日・山口:20日)
- ◆ 技術とビジネスを結ぶ
ー大学院技術経営研究科助教授・松浦 良行氏ー
山口大学大学院技術経営研究科ーMOT入門
⑫ ベッカム選手の移籍金と技術の経済的価値
最も価値ある保有の形は?
MOTは最大の利益につなげるレーン (宇部日報:20日)

編集後記

庭の草木の手入れをしながら、ふと上を見上げると、梅の枝先に蕾が芽生え、また春が巡ってきたことが実感できました。数十年もの間慣れ親しんだ山口大学を去っていく人、新しく入ってくる人と人的交流が活発な時期です。ここに広報誌第78号をお届けします。

本号の特集では3月号と言うことで退職記念特集“未来への躍進に向けて”の内容にさせていただきました。退職される教職員の方々の文章を読むと色々な角度からの“ものの見方”が判り、きっと本誌をお読みいただく読者の方々にとても楽しいものになるものと期待しております。

つつがないご退職 本当におめでとうございます。

先日、秋篠宮紀子様ご懐妊が報じられました。これにあやかって今年は、翔風が吹いてくれることを期待しています。山口大学も大学院としての風貌を整えつつ、この4月より新しく出発します。読者のみなさんからの暖かいご支援を賜りますよう宜しくお願い致します。

(武藤 正彦)

◎山口大学ホームページ<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>

表紙デザイン

教育学部美術教育選修の平成17年度の卒業制作展です。学生8名による絵画、立体、デザイン、写真、木工、陶芸、映像など幅広い美術表現を行いました。

また、修士課程では学生5名による論文と作品を発表しました。美術や美術教育のため発想豊かで多様な表現を目指しています。

